

あいちのたてもの いのりのば編

AITI NO TATEMONO INORINOBA HEN



REGISTERED
TANGIBLE
CULTURAL
PROPERTY



あいちのたてもの
いのりのば編

AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS,
GOVERNMENT OF JAPAN



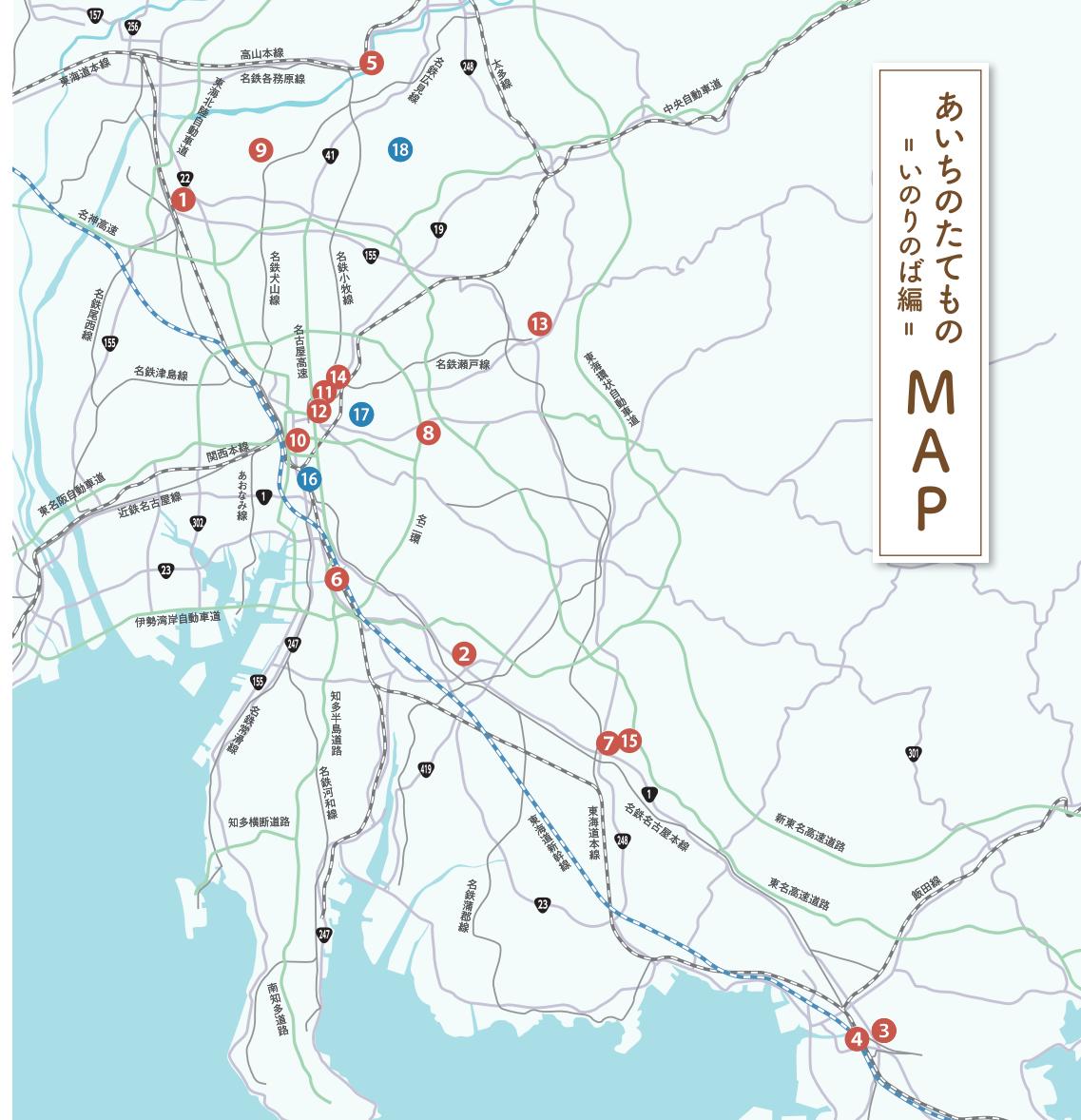
あいちのたてもの いのりのば編

愛知県国登録有形文化財
建造物所有者の会



あいちのたてもの いのりのは"編

絵文 村瀬良太



- | | |
|-------------------|-----------------------|
| ① 真清田神社 » p.12 | ⑩ 崇覚寺 » p.36 |
| ② 知立神社 » p.14 | ⑪ 建中寺徳興殿 » p.38 |
| ③ 安久美神戸神明社 » p.16 | ⑫ カトリック布池教会 » p.42 |
| ④ 旧羽田八幡宮文庫 » p.20 | ⑬ 瀬戸永泉教会 » p.44 |
| ⑤ 寂光院 » p.24 | ⑭ 日本福音ルーテル復活教会 » p.46 |
| ⑥ 春江院 » p.26 | ⑮ 日本福音ルーテル岡崎教会 » p.48 |
| ⑦ 善立寺 » p.28 | ⑯ 熱田神宮 » p.18 |
| ⑧ 蓮教寺 » p.32 | ⑰ 日泰寺奉安塔 » p.30 |
| ⑨ 報光寺 » p.34 | ⑱ 博物館明治村 » p.50 |

もくじ	
はじめに	2
愛知の建物、祈りの場編	4
【コラム】建物を楽しむために	10
◆神社	11
真清田神社	12
知立神社	14
安久美神戸神明社	16
『特集1』熱田神宮	18
旧羽田八幡宮文庫	20
【コラム】建築家角南隆	22
◆寺院	23
蓮教寺	24
春江院	26
寂光院	28
善立寺	30
『特集2』日泰寺奉安塔	32

はじめに

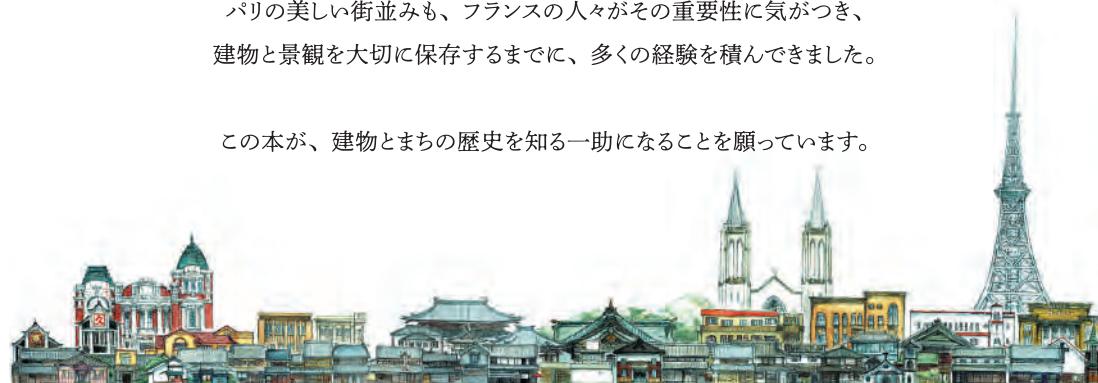
私たちのまわりには、古めかしい洋館や、立派なお屋敷、歴史のある校舎に、清楚な神社、荘厳な寺院や、可愛らしい教会、そして大きなレンガの工場に、役割を終えた電波塔など、年月を重ねた建物がごく自然にまちにとけ込んでいます。そういった文化財として貴重な建物を、国登録有形文化財といいます。日本には他にも、重要文化財や国宝などに指定された建物があり、現在その総数は、1万5000件に上ります。

市指定・県指定のものを含めると、さらにその数は増えますが、一方で、フランスの規定する歴史的記念物の4万4000件には遠くおよびません。日本は文化的には、まだ発展途上なのです。

本書は、愛知県にある国登録有形文化財の魅力を紹介する本です。今回は「いのりのば編」として、江戸時代から昭和にかけて建てられた神社、寺院、教会を中心取り上げています。それらはすべて、あたりまえに残ってきたわけではありません。多くの人々の努力で残してきたものも少なくないのです。そういった意味では、残された建物はすべて価値のある良い建築といえます。そんな身近にある良い建築を知ることで、私たちのまちとその風景を大切に思う気持ちにつながってほしいと思います。

パリの美しい街並みも、フランスの人々がその重要性に気がつき、建物と景観を大切に保存するまでに、多くの経験を積んできました。

この本が、建物とまちの歴史を知る一助になることを願っています。



愛知の建物、

祈りの場編

千年をかけて形づくられてきた建築の歴史があり、装飾にはさまざまな意味が潜んでいます。

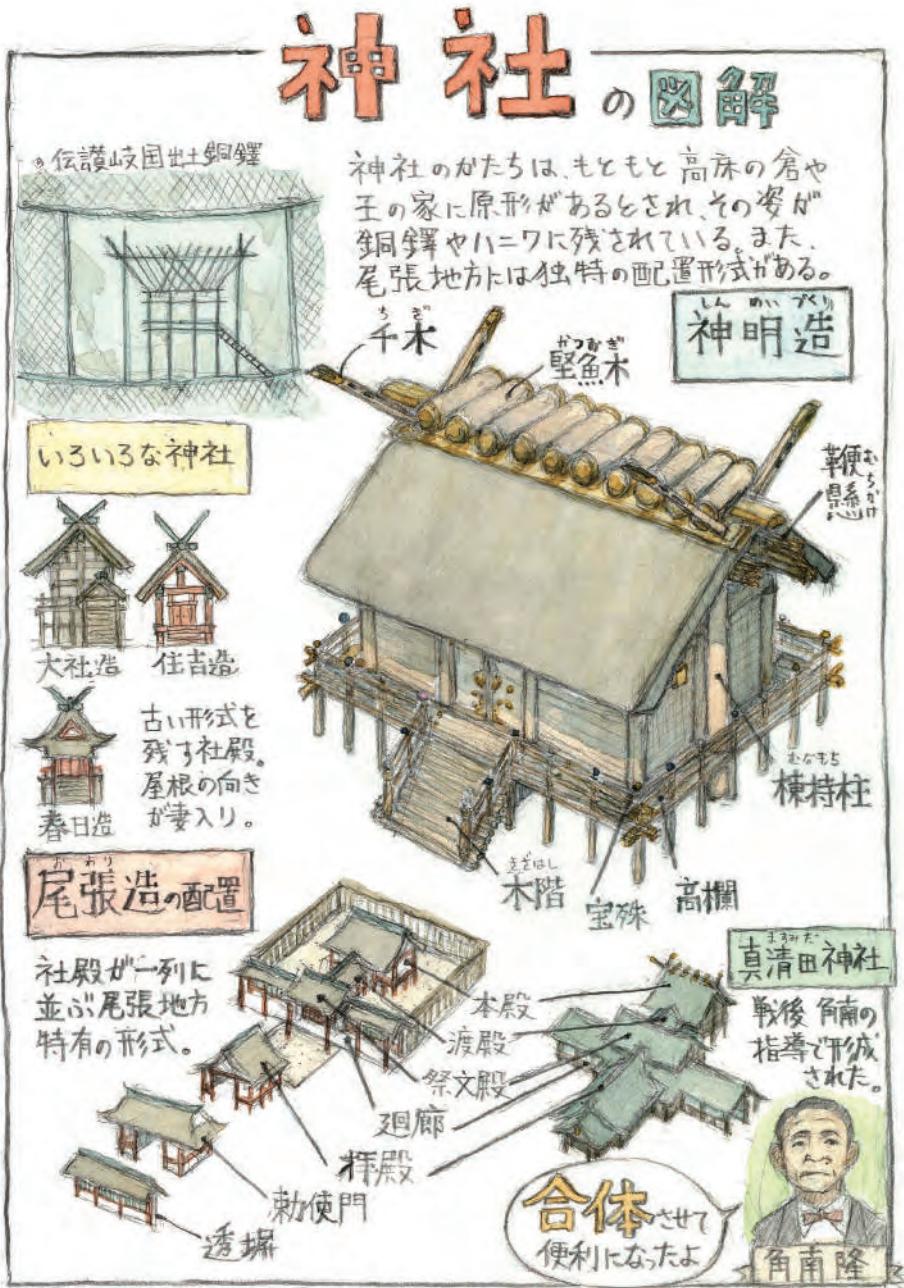
仏教伝来

日本の信仰に大転換が訪れたのは、6世紀のことでした。各地で登場した王のご神体に崇める大神神社などは、日本人の原始の信仰が現れています。そんな神のいる場所に社を建てるようになつたのは弥生時代からで、社殿のかたちには、米作りとともに広まつた高床式の建物が使われました。米作りには、開墾のための道具や集団の力が必要となり、定着したムラが形成されました。ムラには王が登場し、また備蓄した米をめぐつてムラ同士の衝突も起きました。王の住まいは、米の倉庫だった高床式の建物が用いられ、神を祀る社殿もそれに習つて形づくられたと考えられています。

この本で紹介するのは、そんな建物のうち、登録文化財を中心に取り上げています。そのほとんどが、江戸時代以降に建てられたもので、比較的新しい建物になります。ただそれらの背景には、数

はじめに

世界中の建築の歴史は、宗教にまつわる建物に彩られています。日本ももちろん例外ではありません。神社なら伊勢神宮、寺院なら法隆寺、教会なら大浦天主堂など、素晴らしい建物がたくさんあります。



が高床式の建物で、屋根の上には千木や堅魚木などの装飾が載っているのは、王の住まいだったころの名残といわれています。

太古の祈りの場

有史以前から日本人は、太陽や海、山など自然の中に神がいると考へ、これを敬つてきました。例えば、奈良の三輪山をご神体に崇める大神神社などは、日本人の原始の信仰が現れています。

そんな神のいる場所に社を建てるようになつたのは、弥生時代からで、社殿のかたちには、米作りとともに広まつた高床式の建物が使われました。

米作りには、開墾のための道具や集団の力が必要となり、定着したムラが形成されました。ムラには王が登場し、また備蓄した米をめぐつてムラ同士の衝突も起きました。王の住まいは、米の倉庫だった高床式の建物が用いられ、神を祀る社殿もそれに習つて形づくられたと考えられています。

伊勢神宮などの古い形式を残す社殿が建立したとされるのが法隆寺です。現在の法隆寺西院は、7世紀後半の再建と考えられていますが、それでも世界最古の木造建築として、太古の寺院の姿を伝えていきます。

寺院の建立については、古墳を造営し

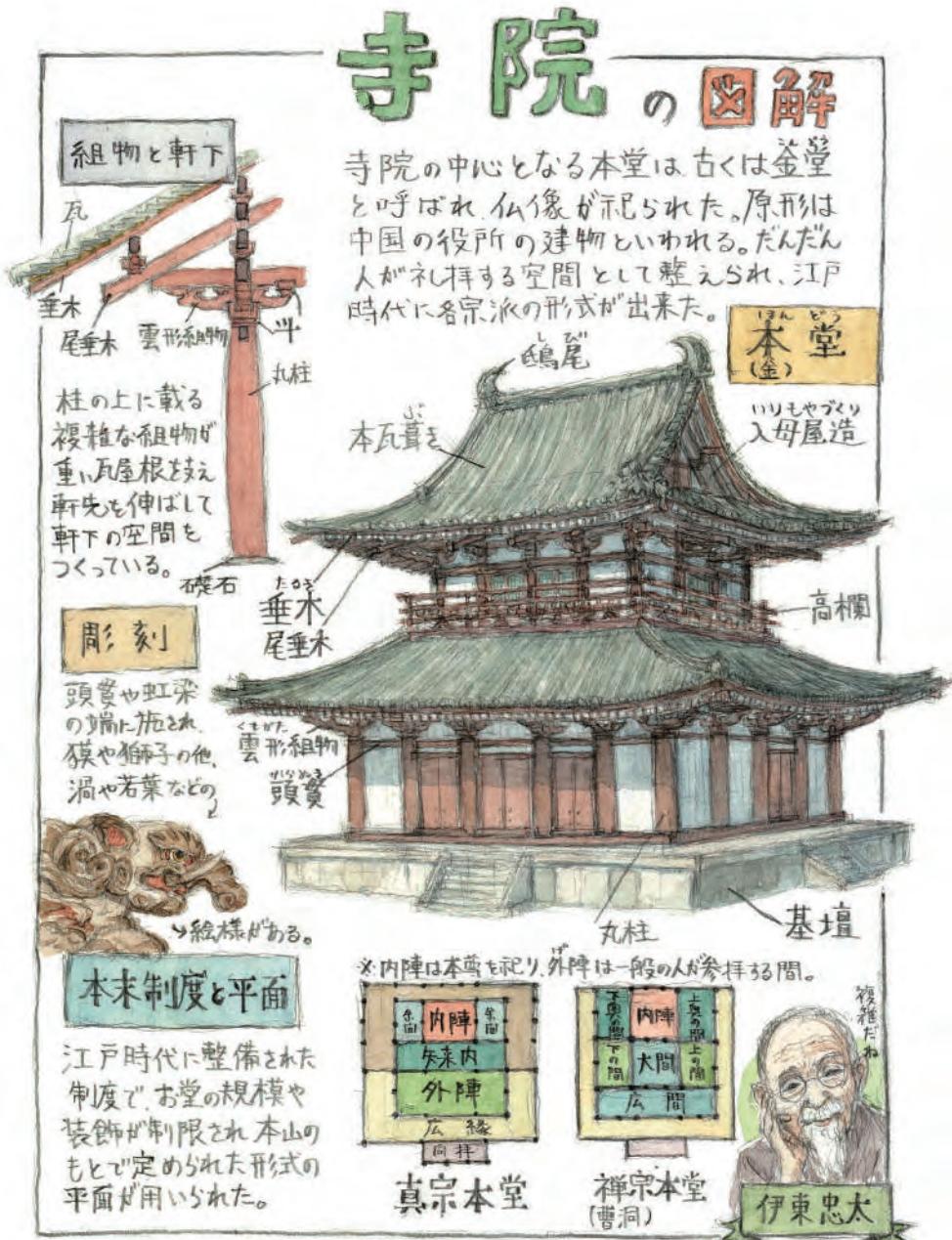
た土木技術が応用され、またお堂の建設には新しい技術が導入されました。特に瓦と礎石は、建物の耐久性を格段に飛躍させました。雨の多い日本では、建物を傷めるのが木材の腐食だったため、瓦で屋根を覆い礎石で柱が地面から切り離されたことは、大きな進歩となつたのです。

8世紀の半ば、平城京に東大寺が建立されたときに、九州宇佐地方の八幡神が援助を申し出て、同地の銅が多く使用されました。このような日本古来の神と仏教が交わることを神仏習合と言います。この頃から、神社に寺院の形式が取り入れられ、朱塗りで向拝の付いた春日大社のような社殿が形づくられました。

また、全国の神社の近くに、神を守る目的で神宮寺が建立されています。創建時の寂光院は白鳥山神宮寺として建立され、また知立神社の境内にたつ多宝塔も、神宮寺の名残です。

中世の新仏教と構造革命

仏教の伝来で日本の社会は大きく変



江戸時代に整備された制度で、お堂の規模や装飾が制限され、本山のもとで定められた形式の平面が用いられた。

わりました。7世紀後半には中国に習つて律令が敷かれ、都も平城京から平安京と移り変わり、大きな寺院も建てられました。また都には、寺院の講堂に檜皮の屋

根を葺いた貴族の邸宅が登場しました。これが後に寝殿造となり、室内を飾つた御簾や置き畳、燈台や丸柱などの形式は、現在の社殿へと受け継がっています。

その一方で、地方の支配は武士へと移り、古代の支配体制が崩壊していきます。また仏教も、武士や農民らに開かれた禅宗や浄土宗などの新仏教が登場します。

なかでも親鸞聖人の起こした浄土真宗は、最大の宗派へと発展していきます。報光寺や蓮教寺、崇覚寺も浄土真宗のお寺です。

ところで、建築にとって技術的な革新となつたのは、禅宗の建物でした。鎌倉幕府には建仁寺などの禅宗の寺院が開かれ、中国から導入された新しい技術は、以後のさまざまな建物にも応用されました。

建築史ではこれを「禅宗様」といいます。

春江院本堂は、禅宗の方丈から発展した

禅宗は他にも、喫茶や水墨画、枯山水の庭など新しい文化をもたらしました。ものです。

安土桃山文化と大工棟梁の登場

応仁の乱以降、室町幕府は衰退し、日

本は戦国時代に突入します。この頃、民衆に浸透した浄土真宗は、一向宗として一大勢力となり、また各地では守護や大

名が台頭してきます。それら地方の領主は、防備のために砦を築き、それが後に織田信長の手によって、絢爛豪華な安土城天守の建造につながっていきます。

その背景には、鹿苑寺金閣のきらびやかな北山文化と、戦さに備えた砦や櫓の建設技術、そして領主が抱える労働力が支えていました。

また、絢爛豪華な建築美は、徳川家康を神として祀った日光東照宮で最高潮に達します。東照宮の諸堂は、禅宗様の形式に習い、装飾は漆や胡粉、金箔や極彩色で飾りたてた艶やかな建物です。建中寺の御靈屋もその形式を受け継いだ

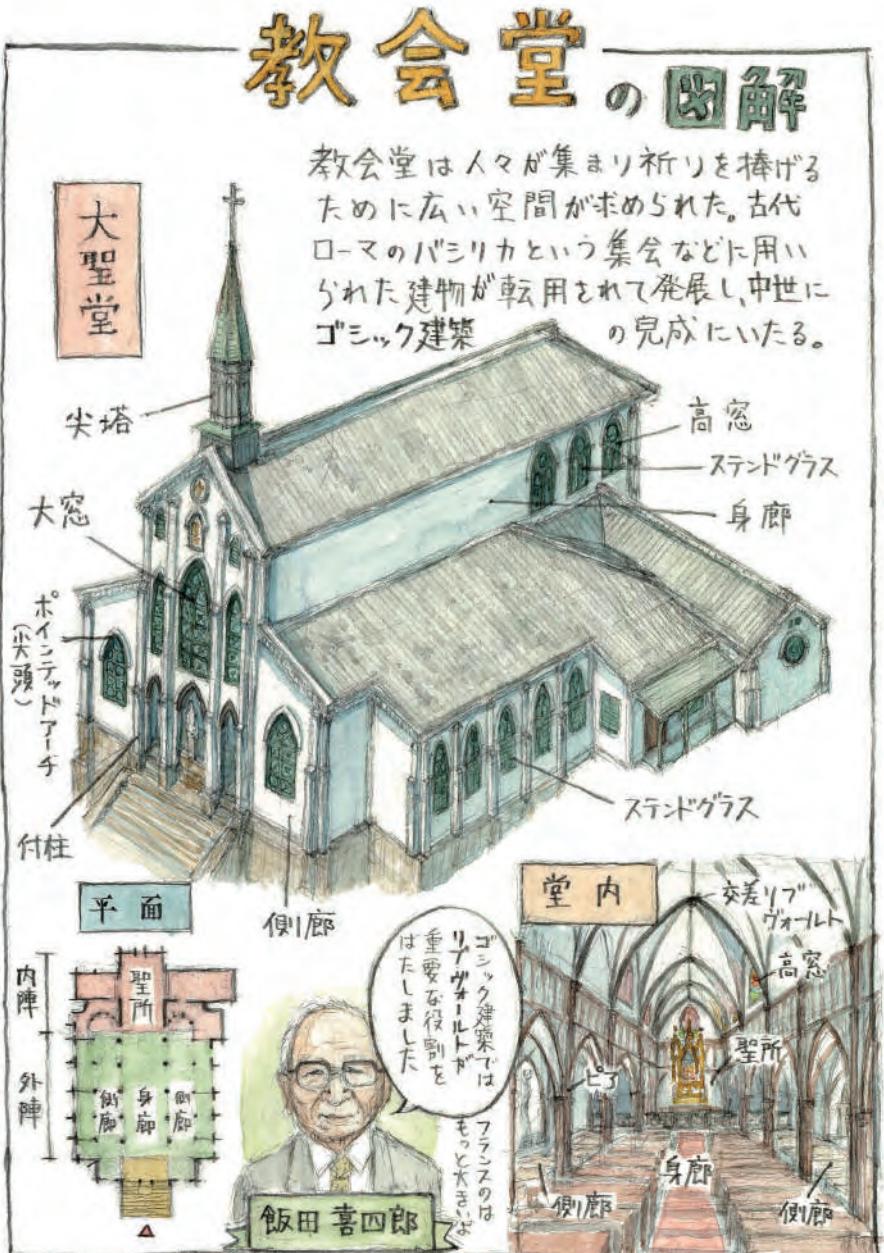
靈廟です。

しかし江戸時代に城の建設は禁止され、また本末制度で、寺社の規模や豪華な装飾も制限されていきました。戦国時代には、各地で活動していた工匠たちも國ごとに定着し、職能化が進みました。尾張の名工伊藤平左衛門や竹中家は、そんな時代に登場した棟梁たちでした。

ところで、近世の日本宗教界ではもうひとつ、大きな変革が起こりました。それはキリスト教の伝来です。厳しく禁止されたキリスト教徒を取り締まるため、寺院が戸籍を管理する檀家制度ができました。一方で、境内には寺子屋なども設けられ、寺院は教育の場としても使用され、庶民の生活の中心的な役割を果たすようになりました。

近代日本と國家神道体制

江戸時代が終わり、明治になると、それまで徳川幕府の機構の一端を担っていた寺院は、廃仏毀釈の憂き目に遭います。そして、仏教に代わる新しい国家の宗



教として整備されたのが、天皇家の直系となる伊勢神宮を頂点した神道でした。

それがあわせて社殿や境内の再整備も進められ、神宮寺の多くが破棄されました。熱田神宮は、尾張地方に伝わる尾張造という社殿形式を、伊勢神宮の神明造に改めました。また安久美神戸神明社も同じ形式に習いました。それら社殿の整備に務めたのが、内務省技師の角南隆でした。

一方で、キリスト教がようやく公認されると、長崎には大浦天主堂が建設され、同地には多くの魅力的な教会が建てられました。カトリック布池教会は、そんな長崎の教会堂の流れを受け継いでいます。またプロテスタント派の瀬戸永泉教会は、愛知県内でも初期の教会堂です。

激動の時代は、やがて太平洋戦争へと進み、神社や寺院、教会などの祈りの場の多くも戦災に遭いました。特に、軍需工場近くの社寺は被害が大きく、熱田神宮や真清田神社、東本願寺名古屋別院などは、境内のほとんどの建物を焼失しました。

おわりに

太平洋戦争が終わり、國家神道体制は解体され、有史以来続いていた政治と宗教の関係も分離されました。戦災を受けた神社や寺院も復興され、また日本福音ルーテル教会などのキリスト教の教会堂も新たに建設されました。

現在の私たちの生活は、かつてのようまっただように思えます。しかし、その一方では、自然災害や疫病など、人知を超えた驚異に直面した人々が、救いを求めて神仏にすがり、今も祈りの場で手を合わせます。

神社と神道

劇的に変化していく現代社会の中では、神社や寺院や教会は、まちの歴史を伝える生きた史跡です。そこには、神話の世界から古代の国造り、また戦国時代の英雄たちの息吹が残され、大切に受け継がれているのです。

建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物は見るだけで楽しいものです。旅先や、いつもの街並みの中で良い建物を見つけた時は、まるで大切なからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれですが、あえてガイドラインを紹介するなら、まずは建物の周りの状況を眺めてみてください。なぜそこにその建物がたっているのかを、道路や街並みをヒントに探ってみましょう。

それから、建物をじっと見つめて、建物に漂っている雰囲気をじっくり感じてみましょう。もし上手くいかない時は、ディテール（細部）を目で追いかけてみてください。なんとなく感じていた雰囲気は、色味が理由かもしれませんし、細部に施された装飾が原因かもしれません。

雰囲気を味わえるようになったら、建物のたどってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。年代や様式、デザイン、構造の種類などの知識があれば、より鮮明に想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物を大好きになっていれば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【建物を彩る者たち】

神社や寺院、教会には、不思議な装飾が建物の至るところに施されています。例えば、神社の屋根から突き出ている千木や、棟の上の堅魚木などは、太古の王たちの住まいを象徴するシンボルだったと言われています。

また、寺院の柱の上部に獅子や狛の彫刻がついているのは、邪を追い払い争いを避ける意味が込められています。一方、教会のステンドグラスは、文字の読めない信者たちに、ヴィジュアルで聖書の物語を伝える目的がありました。

これらはいずれも、本来は建物の構造の発展と密接に関わっていました。建物を彩る装飾は、そんな建築の変遷をより深く理解する入り口にもなってくれます。

【建築マニアの嗜み】

建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には建物へのいたわりの心を持って、大切に扱いましょう。また、中には見学のできない建物もあります。そういう場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができる、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

神社

神社の原型は、神を祀る仮設の建物「屋代」だったと考えられている。

目には見えない神を屋代に迎え、神饌や舞を捧げて五穀豊穣を祈った。

神への祈りの場は穢れを忌避し、清浄が求められた。



登録／2006年8月/2007年10月
登録基準／造形の規範となっているもの(本殿及び渡殿)
国土の歴史的景観に寄与しているもの(祭文殿・北門及び透塀)



渡殿。厳かな室礼が美しい

緑青色の銅板屋根で繋がり、まるで一つの建物のように見えます。この複雑で一体化された社殿のかたちが、真清田神社の特徴です。

尾張國の一之宮

真清田神社の創建は古代と伝わり、かつては木曾川近くにあったといわれています。また、この辺りを治めていた尾張氏の祖神天火明命を祀り、中世に編まれた『延喜式』の神名帳にもその名が記載されています。

完成された尾張造

日本各地の神社には独自性があり、社殿にもそれが現れています。尾張地方では「尾張造」と呼ばれる、社殿を縦一列に配置する独特の形式があり、真清田神社もその一翼を担っていました。

戦災にあった真清田神社は、昭和22年の復興計画で元内務省神社局の角南隆と森恒保に協力を要請します。二人は焼失前の社殿の位置や大きさ、形式を保ちつつ、機能に合わせて新しい社殿を設計しました。

少し具体的に紹介しましょう。正面の一番手前にある拝殿は、元は巫女が舞踊を行う場所でしたが、手前に切妻屋根の向拝を伸ばすことで参拝者の空間を確保してあります。

奥に続く祭文殿は、かつては左右に伸びる回廊に開かれた門のような位置づけでしたが、祭祀の変化に伴い大きな空間に変更されました。その奥には神主が祝詞を奏上する渡殿があり、最深部の本殿と連結されています。



photo:Hitoshi Kumamoto

ま すみ だ 真清田神社

伝統の形式と近代建築が融合した、尾張造の完成形



拝殿からの眺め。わずかに見える奥の室礼が神秘的

まちのはじまりの神社

歴史ある社寺の名称は、そのまままちの名前になっていることがあります。纖維のまち一宮市の「いちのみや」とは、尾張國一之宮の真清田神社のことを指します。

中心街のアーケードの最深部に、まちの喧騒から隔てるような立派な楼門がたち、広々とした境内の奥に真清田神社の社殿があります。また、後ろに控える森の存在が、厳かな印象をより強めています。

よく見ると社殿はいくつかの建物が集まっていることに気がつくでしょう。建物同士は

一体化させて、機能的な社殿を創り出しました。その一方で、それぞれの社殿は、床や天井の高さと形状、また儀礼の装飾などで空間の違いがきちんと示されています。

真清田神社の社殿は、機能に特化した近代建築と伝統文化、そして地域に根づく社殿形式とが見事に融合した、近代神社建築の名作です。



白砂に浮かぶ本殿

1957年(昭和32年)
木造平屋建て
「設計」角南隆・森恒保
一宮市真清田1-2-1
<http://www.nasunidia.or.jp>



重要文化財の多宝塔

拝殿、神籬門で構成された社殿形式でした。社殿についても興味深い変遷の歴史があります。知立神社は、江戸時代には本殿と幣殿、

神は鶴草葺不^{うがやまとあづのみ}合命^{めい}を中心^{あらわ}に四柱^{よつ}が祀^{まつ}られています。『延喜式』の神名帳にも名を連ね、三河の國の二宮として国司から祭祀を受けました。ちなみに知立を池鯉鮒と記したのは江戸時代からで、神橋のかかる池に鯉や鮒がいたことから使われだした言葉遊びに由来します。

また戦国時代になり、今川勢の兵火で社殿を消失し、現在地へ遷座しました。その時に、かつての境内地に隣接していた神宮寺の多宝塔が消失を免れ、こちらに移設されたと考えられています。

知立神社と歴史の変遷

知立神社の創建は古代に遡ると言われ、祭神は鶴草葺不^{うがやまとあづのみ}合命^{めい}を中心^{あらわ}に四柱^{よつ}が祀^{まつ}されています。『延喜式』の神名帳にも名を連ね、三河の



photo: Hitoshi Kumamoto

ちりゅう 知立神社

まちの歴史が織りなす、三河国の二宮

不思議な境内
 知立神社の境内は、とても不思議な風景に囲まれています。
 鳥居をくぐると、すぐ右手には本来は寺院にある多宝塔がたち、左手を見ると古びた学校のような建物があります。そして何より違和感を覚えるのが、境内のすぐ目の前に高架バイパスが通っていることです。
 境内の奥を見ると、小池に架かった神橋の向こうに切妻屋根が重なる知立神社の社殿が、森に守られるように佇んでいます。



未だ文化財ではないが、興味深い歴史を持つ養正館

境内には他にも養正館という趣のある建物があります。元は明治用水の事務所でしたが、女学校などに転用された後に知立神社へ移築されました。

この建物は、明治23年に行われた陸海軍の合同演習のおり、同地を訪れた明治天皇の休息所になりました。広い2階には白い布が床や天井に隙間なく張られて、明治天皇をお迎えしたと言います。

ところで、参道を貫く高架バイパスも、知立

の高度成長期を支えた重要な産業道路です。そのため、例祭で引き回される山車も、市民たちが協力しあい、高架を迂回する形で柔軟に対応されてきました。

知立神社の不思議な風景は、そのひとつがまちの歴史を物語る大切な生き証人なのです。

養正館のこと

以前はそれぞれが独立した社殿でしたが、現在は渡り（廊下）で繋げられ、柱間に壁や窓が入れられています。その一方で、社殿ごとに室礼^{しつらい}が変えられ、本殿に行くほど床を上げて、厳かな雰囲気が高められています。

特に目を引くのが本殿前の幣殿の室礼です。御簾^{みす}が吊られ、黒く艶めく床には緑の置き畳を敷き、丸柱で構成された空間は、平安時代の寝殿造の美を彷彿とさせます。

本殿 / 1831年、幣殿 / 大正期、
 祭文殿 / 明治期、拝殿 / 昭和29年、
 柱梁 / 不明（祭文殿および渡りは竹内善助）
 知立市西町・神田12
<https://chiryu-inia.com>

登録／2010年9月
登録基準／造形の規範となっているもの(本殿・幣殿及び拝殿)
国土の歴史的景観に寄与しているもの(手水舎・神庫・神楽殿)



棟持ち柱が美しい本殿

安久美はかつて飽海と記され、蛇行する豊川の合流地をいました。このあたりには古代の律令制で置かれた郡衙があり、豊川の渡し舟の往来で古くから人が集まる場所だったといいます。

940年、平将門の乱の平定を伊勢神宮に祈願した朱雀天皇が、飽海を神領として寄進し、それ以後天照大神を祀る神明社となりました。名称の神戸とは神領を意味します。

その頃の社地は豊橋公園内にあり、ここに吉田城を開いた今川氏をはじめ、多くの武将から崇敬されたといいます。明治18年、吉田城に歩兵十八聯隊が置かれることになり、社殿は現在地へと遷座されました。

変遷の歴史

安久美はかつて飽海と記され、蛇行する豊川の合流地をいました。このあたりには古代の律令制で置かれた郡衙があり、豊川の渡し舟の往来で古くから人が集まる場所だったといいます。

940年、平将門の乱の平定を伊勢神宮に祈願した朱雀天皇が、飽海を神領として寄進し、それ以後天照大神を祀る神明社となりました。名称の神戸とは神領を意味します。

その頃の社地は豊橋公園内にあり、ここに吉田城を開いた今川氏をはじめ、多くの武将から崇敬されたといいます。明治18年、吉田城に歩兵十八聯隊が置かれることになり、社殿は現在地へと遷座されました。

奇祭、鬼祭り

安久美神戸神明社では、毎年2月になると奇祭として名高い鬼祭りが開催されています。

赤鬼が天狗に退治される筋書きで、赤鬼の

社殿の隠れた見どころは、本殿の棟持ち柱です。節のない美しい丸柱がすくと伸び上る姿はとても感動的です。

敷地にびったり収まった社殿には、そんな伝統建築の美と近代建築的な発想で綿密に計画された美が潜んでいます。



赤鬼。鬼祭りは重要無形民俗文化財

ぴったり収まった社殿

現在の社殿は昭和5年に整備されたもので、設計は内務省神社局の角南隆が担当しました。形式としては、伊勢神宮に習って神明造が採用されました。

特徴的なのは、拝殿とその奥の幣殿、両脇の樂舎・神饌場、そして最深部の本殿が一体化されていることです。これは角南が創作した形式で、機能的に祭祀などを執り行えるよう考案されました。

また、連結された内部では調度だけでなく天井高や床高などで空間の差異化が図られ、本殿を頂点として感じられるような構成になっています。

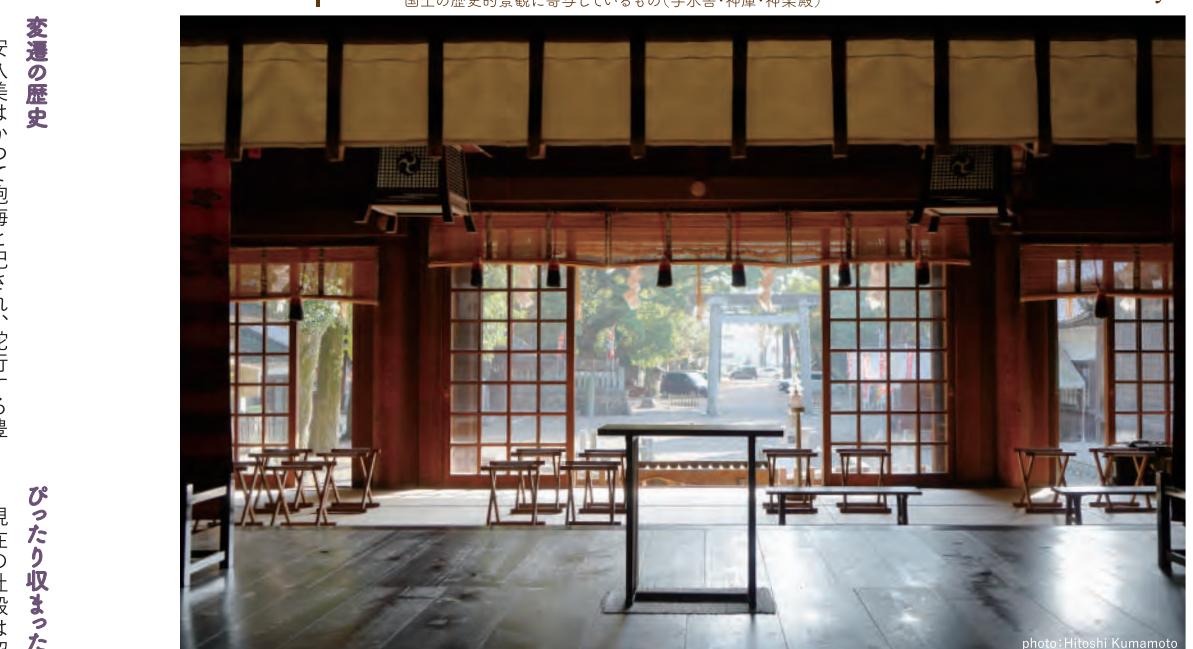
社殿の隠れた見どころは、本殿の棟持ち柱です。節のない美しい丸柱がすくと伸び上がる姿はとても感動的です。

敷地にびったり収まった社殿には、そんな伝統建築の美と近代建築的な発想で綿密に計画された美が潜んでいます。

ユーモラスなしぐさや、真っ白い痰切り飴を境内に撒き散らすクライマックスは圧巻です。

豊川流域には、古くから五穀豊穰を願う田楽が根付き、鬼祭りもこの流れを汲んで創作されたと考えられています。それら伝統文化は社地が変わっても大切に受け継がれ続けています。

境内から路面電車が走る姿眺めていると、ふと自分が異世界にいるような錯覚を覚えることがあります。神社にはそんな現実とは違う時間が流れているのかもしれません。



拝殿から境内を眺める。鳥居の向こうに路面電車が走る、不思議な風景

photo: Hitoshi Kumamoto

安久美神戸神明社

都市空間にぴったり収まった、鬼祭りの神明社



拝殿の外観。手前の八角は儀調場

掃き清められた神社の境内は、どこか異世界の雰囲気が漂います。

豊橋市を通る国道1号線沿いには、豊橋市公会堂や豊橋ハリストス教会など歴史的な建物があり、豊橋公園の緑を背景に穏やかな風景が続きます。

その並びに間口いっぱいに鳥居が立ち、奥には敷地に眺えたようにぴったり収まった、安久美神戸神明社の端正な拝殿があります。

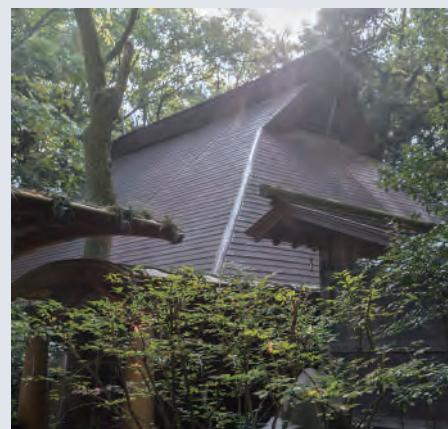
1930年(昭和5年)
木造平屋建て
〔設計〕角南隆
豊橋市八町通3-17
<https://omimatsuri.jimdofree.com>



登録文化財の龍影屋は旧名古屋博物館の遺構

鬱蒼とした森が厳かな雰囲気を漂わせる伊勢神宮に次ぐ由緒ある社として、当時の宮司角田忠行によって推進されました。

神への祈りの場



合掌造の民家を移築した、登録文化財の又兵衛

が参加しました。
しかし一方で、戦前の熱田区は飛行機産業が集まっていた地域もあり、太平洋戦争下で激しい空襲を受け、熱田神宮も本殿をはじめ多くの社殿が被災するなど甚大な被害を受けました。

復興されたのは昭和30年のこと。大規模な再建のために、全国から多くの寄付が集まつたと言います。復興計画の神宮造営局長には角南隆が着任し、本宮拝殿の翼廊や境内への文化施設の建設を指導しました。

熱田神宮は四方を大通に囲われています



拝殿のようす。両脇に広がる翼廊は戦後再建時に角南隆が指導したもの

あつた 热田神宮

特集 1

尾張造から神明造へ

熱田神宮は年間約700万人の参拝者が訪れる、全国でも有数の神社です。創祀は1900年前に遡るといわれ、三種の神器草薙神剣を祀っています。近郊には、草薙神剣を日本武尊から預かった宮簷媛命のものとされる断夫山古墳もあり、太古の歴史を今に伝えています。

現在の熱田神宮の本宮は、伊勢神宮ならった神明造という形式の社殿ですが、以前は真清田神社などと同じく尾張造の社殿配置でした。その頃の姿は、境内の南新宮社の朱色の社殿や、こころの小径にある復元された土用殿に残っています。

社殿を一新したのは明治維新後のことです。



尾張造だった頃の形式を残す土用殿



離れの和室。廊下を右に進むと土蔵がある

埋もれた文化遺産

文庫開設からおよそ60年後、羽田野ら関係者がこの世を去ると、文庫は閉鎖され、蔵書も売却されました。その後、散逸を惜しんだ地元の人々が買い戻し、それを豊橋市が買い

者で、郷土史の編纂や産業の発展にも貢献しました。

1848年、羽田野は有志らと講を組織し、境内に文庫を開設します。書籍の蒐集には全国の学者や藩主などに要請し、ビラを刷って勧請を呼びかけたそうです。そして、開設から20年後には1万冊を超える本が集まりました。

この文庫が画期的だったのが、蒐集した本を現在の図書館のように、誰にでも貸し出したことです。神社に残された木製の箱には、一ヶ月を限りに返納することや、貸出は10冊

からあります。離れは羽田野の邸宅の一部で、大正末頃に現在の場所へと移されました。離れにはどころどころに雅な意匠が残り、庭に面した明るい廊下に沿って10畳の和室が2つ並んでいます。廊下を折れ曲がると、少し離れて土蔵がたっています。

文庫があつた頃の土蔵は敷地の中心に置かれ、すぐ側に防火のための池や水路が配されました。また蔵前には木製の格子ががめられた前室が付いていました。

当時を描いた絵から、土蔵の前には紅葉があり、風情のある姿だったことが伺えます。



但し書きの描かれた木製の箱

蔵・門／1850年
土蔵造／木造／木造平屋建て
〔設計〕不明
豊橋市花田町字斎藤56-3



土蔵正面。ごく普通の土蔵が歴史的背景で貴重な文化遺産となる



photo: Hitoshi Kumamoto

はだはちまんぐう 旧羽田八幡宮文庫

歴史に埋もれた、江戸時代の図書館

類例のない文庫の遺構

豊橋駅西側の大通りを脇道に入り、住宅街の中にある羽田八幡宮の参道を進むと、賑やかな保育園の反対側に、古い小さな門があります。門の並びには黒い波板の貼られた土蔵がたっています。この土蔵が、江戸末期に建てられた類例のない文庫の遺構であることは、ほとんど知られていません。

羽田八幡宮と羽田野敬雄

羽田八幡宮は八幡大神（応神天皇）を祀る宇佐八幡宮の分霊社です。この境内に文庫を開設したのが神主の羽田野敬雄です。羽田野は幕末から明治初期にかけて活躍した国学

までとすることなどが明記されています。

境内には松蔭学舎という閲覧所もあり、識者による公開講義も行われ、近代図書館を先取りした運営がなされていました。

一方で、建物は譲渡され、神社の手から離れてしましました。それから90年後、再び地元の有志の協力で、文庫跡地と建物が羽

田八幡宮の所有となり、歴史的な価値が再評価されて、国の登録文化財になりました。

何気なくまちに溶け込んだ古びた建物すごい歴史を抱えているかもしれない。旧羽田八幡宮文庫の存在は、そんなロマンを搔き立ててくれます。



参道脇にひっそり佇む門

建築家 角南 隆

【近代神社建築のパイオニア】

この項でたびたび登場する角南隆という建築家は、実は建築を生業にしている人にもあまり知られていません。大正から昭和にかけて角南が修復や設計した神社は膨大な数にのぼり、また伊勢神宮の式年遷宮に3度も関わった、近代神社建築のパイオニアです。

明治20年に岡山に生まれた角南は、東京帝国大学を卒業後、明治神宮造営局に入局します。明治神宮は、明治天皇を祀るために建立された神社で、その設計は建築史家伊東忠太らが担当していました。角南は伊東のもとで造営事業に参加する中で、古い社殿形式の問題点に気づきます。そのひとつが別々に分かれた社殿の配置でした。

角南の同世代には建築家アントニン・レーモンドらがおり、機能に重きをおいたモダニズム建築も登場していました。内務省の技師となった角南は、伝統的な形式を継承しつつ、機能的な新しい社殿を探求し、全体をひとつなぎにまとめる形式を創りあげました。

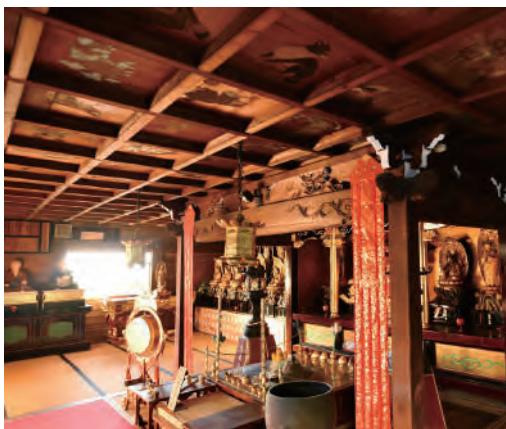
昭和30年に戦災復興で再建された明治神宮の社殿は、角南の畢生の作品です。その同時期には熱田神宮や真清田神社の再建にも携わり、愛知へも頻繁に訪れていました。角南はその後、日本建築工芸株式会社を設立し、神社建築に計り知れない業績を残して、昭和55年に93歳で亡くなりました。



重要文化財の明治神宮外拝殿

寺院

寺院の本質は、祇園精舎からずっと僧たちの修行の場であった。
仏教の発祥地インドでは仏像やそれを祀る堂ではなく、
日本に移入された寺院の形式は中国で役所を元に形づくられた。
「寺」は役所を意味したという。



随求堂内観。夕日のさす堂内は筆舌に尽くしがたい

かれたのは、このあたりが東山道の要所だったことに関係しています。

その後、奈良時代に寺号を八葉蓮台寺に改称し、密教の学山として発展すると、多くの子院や塔頭が建てられ、たくさんの学僧が訪れる大寺院になりました。ところが、本堂が火災で焼失すると、子院は散り散りになり、寺は衰退していきました。

1565年、美濃攻めで犬山を攻略していた織田信長は、荒廃した寺の姿を惜しみ、繼鹿

尾山に留まっていた子院の寂光院に寺領や山林を寄進し、復興を命じました。その時の信長の判物は、今も寺宝として残されています。

境内にある現在の諸堂は、近世以後に建てるられたものです。中でも薬医門や山上の本堂、隨求堂、弁天堂、馬鳴堂は、尾張の名工竹中家が代々手掛けた見ごたえのある建築です。

山上の見晴らしの良い場所にたつ本堂は、手前の空間を吹き放ちにした気持ちの良いお堂で、高欄のない広縁がいつそう開放的な気分を醸しています。また、向拝の虹梁から突き出された獅子や狛の彫刻も、彫りが深くシャープで凛々しいです。

一方、堂内は千手觀音菩薩が鎮座する宮殿が間近に迫り、美しく飾られた密度の高い空間になっています。

その本堂と渡廊下でつながる隨求堂もまた、魅力のあるお堂です。かつては籠堂と呼ばれ、参拜者たちが泊まるためのお堂でした。

角柱で高く持ち上げられた堂内にはたくさんの觀音像が祀られ、また開山道昭、中興

慶源らの彩色された塑像が脇に鎮座し、低い天井の格間にはさまざまな絵がびっしりと嵌

奇跡の空間

尾山に留まっていた子院の寂光院に寺領や山林を寄進し、復興を命じました。その時の信長の判物は、今も寺宝として残されています。

尾張のもみじぐら

寂光院は紅葉の美しいお寺としても有名です。しかし、少し前までは現在のような觀光名所ではなく、伊勢湾台風で甚大な被害を受けるなど、幾度も危機に瀕してきたといいます。それを救ったのは、歴代の住職たちでした。

古代から続く名刹は、お寺を守る人々によって次の時代へと手渡されてきたのです。



織田信長も眺めた絶景

本堂／1879年 隨求堂／1805年 薬医門／1836年
木造平屋建て 棟梁・竹中和泉正敏九世・竹中藤五郎十二世
大山市繼鹿尾山
<https://www.jakkoin.com>



本堂と隨求堂が並ぶ風景。夕日がお堂を赤く照らす

じゃっこういん 寂光院

絶景に開かれた、奈良時代創建の学山

絶景のお堂

古来より、密教の寺院は修行の場として峻

厳な山奥に開かれ地形に沿って建てられた

お堂は、自然と溶け合った素晴らしい風景を

創り出してきました。



随求堂外観。右手に見えるのが本堂と繋ぐ渡廊下

繼鹿尾山八葉蓮台寺寂光院略記

繼鹿尾山の開山は654年といわれ、唐に渡った僧道昭が創建し、また日本武尊に繋がる熱田神宮との奇縁で白鳥山神宮寺が建立されたと伝わっています。険しい岩山に寺が開

けられました。

寂光院は、そんな絶景の広がる険しい岩山に開かれた、愛知でも指折りの名刹です。

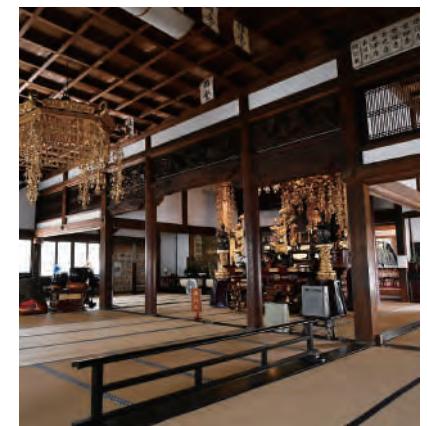
登録／2005年7月
登録基準／造形の規範となっているもの(本堂・本玄関及び書院・不老閣・茶室・鐘楼・山門・庫裏)



photo: Hiroshi Yoshida

しゅんこういん 春江院

丘陵地に囲われた、さまざま和風建築のあるお寺



堂内の眺め。虹梁を抜いた広々とした空間

酒蔵のある町並みの里山の寺

名古屋の南に位置する大高町は丘陵の多い土地で、常滑街道沿いには江戸時代から明治にかけて栄えた酒蔵がいくつも残っています。その町並みの奥の丘陵へ進むと、住宅街の中に竹林に囲まれた春江院の山門があり、風にざわめく木々が深山の風情を漂わせています。山門をくぐり路地を抜けると、突然視界が開け、正面には大きな屋根の立派な本堂がたっています。広々とした境内には鐘楼や庫裏があり、周りを林が取り囲むことで、まるで昔話の世界に足を踏み入れたような印象を受けます。

います。高架の23号線が近郊を走り、昭和から平成にかけて進められた宅地開発が丘の上にまで迫っています。

そこから境内を見下ろすと、大小の屋根が連なる風景が和風建築を集めた箱庭のように見えます。丘陵に囲まれた里山の寺は、ぎりぎりの線で魅力的な雰囲気を保っています。

尾張の名工が手掛けた本堂

多宝如来を本尊とする大高山春江院は、大高城領主水野大膳が父の位牌を祀るために建てた小さなお堂が始まりと言われています。境内が充実していったのは江戸末期の頃からで、酒蔵をはじめとした檀家たちの寄進により整えられました。

曹洞宗に属する春江院は、本堂にもその流れを見ることがあります。もとは禅宗の住職の住まいだった方丈を、修行のできるお堂に流用した形式です。

和風建築のテーマパーク

本堂に隣接した玄関の先には、有松の名家から譲り受けたという書院があります。狩野永秀の襖絵をはじめ潇洒な設えが室内を飾り、大きな障子を開け放つと、竹林を借景とした美しい庭を眺めることができます。また、庭の風景に彩りを与えていた数寄屋や茶室なども見どころです。

もうひとつ紹介したいのが、大きなクドのある庫裏です。クドとは煮焼きをする土間をいい、火を扱う場所であるため吹き抜けの大空間となっています。そこに架かる弧を描いた大梁が大黒柱に支えられる姿はとてもダイナミックで、見ごたえがあります。



庫裏のクド。松の大梁は境内に生えていたもの



内庭の茶室。数寄屋の向こうに竹林が見える

宅地開発の波

春江院の周辺は、近年劇的な変化を遂げて

本堂・山門／1830年
書院／明治12年移築
庫裏／昭和8年
木造千屋建て
木造2階建て
棟梁本堂／竹中和泉正敏九世
名古屋市緑区大高町字西向山5

岡崎と善立寺
大光山善立寺は、曼荼羅を本尊に祀る日蓮宗身延山久遠寺の直末寺です。創建は15世紀の中頃で、かつては碧海郡安城にありました。が、徳川家康の祖父松平清康と共に岡崎に移り、江戸時代になって城下町造営のため、現在地へと移りました。その際に本堂を解体して移築したと考えられ、柱にはいかだに組んで川で運ばれた時の跡が残っています。

古くから人の往来していた岡崎では、鎌倉時代以降に多くの寺院が建立されました。足利幕府の庇護を受けた滝山寺をはじめ、松平家の菩提寺の大樹寺などの名刹は全国的にも知られています。

善立寺はその中でも、松平家に仕える武家の祈禱寺として敬われてきました。本堂左脇陣の格天井に嵌められた家紋は、大檀家の武将



左脇陣の家紋が描かれた格天井

時代以降に多くの寺院が建立されました。足利幕府の庇護を受けた滝山寺をはじめ、松平家の菩提寺の大樹寺などの名刹は全国的にも知られています。

</



礼拝殿。通天門ともに伊藤平左衛門十世の作

伊東忠太のストゥーパ
 仏舎利をおさめる奉安塔の設計は、建築史家伊東忠太に託されました。伊東は、明治後期に中国からヨーロッパにかけて、ユーラシア大陸を横断する大調査旅行を敢行し、アジアの建築にも深く通じていました。

ただ当時のインドは仏教国ではなかつたため、仏舎利はタイに渡され、その一部が日本にも贈られることになりました。



基壇から木々越しに奉安塔を見る



※現在は非公開となっています。

奉安塔のストゥーパは釣り鐘に似た形状で、高欄付きの基壇と八角形の胴部の上に乗っています。頂部には金色の宝珠が付けられ、白い花崗岩のストゥーパの上に黄金が輝く姿は少し離れた場所からでもよく目立ちます。基壇の周囲には棕櫚などの木々が植わり、その隙間から奉安塔を見上げると、まるで密林の中で遺跡を見つけたような感動を覚えます。

日泰寺は戦後に境内の整備が進み、現在の

参道はおしゃれな店があつまる名古屋で有数の観光スポットになっています。その深奥には日本で唯一のストゥーパが、悠久の時を刻んでいます。



奉安塔全景。白い花崗岩に金の装飾がきらめく。欄干の装飾が基壇の蕾から上に向かって開いている

日泰寺奉安塔

特集 2

日本で唯一の全佛教寺院
 名古屋には日本で唯一のお寺があります。それが覚王山日泰寺です。本物の仏舎利を祀り、どの宗派にも属さない、極めて異例のお寺です。ちなみに覚王とはブッダのことで、日泰とは日本とタイの結びつきでできたことをあらわしています。

創建されたのは明治37年。その少し前に、インドのブッダの生まれたルンビニーの近くで、イギリスの発掘調査員が丘の下に埋もれた古墳を発見します。その中からちいさな石の壺の中に人骨を見つけ、それが本物の仏舎利（ブッダの遺骨）であることが確認されました。



県指定文化財の通天門。礼拝殿とも以前は登録文化財

登録／2017年5月
登録基準／造形の規範となっているもの（本堂・書院）
国土の歴史的景観に寄与しているもの（庫裏・鐘楼・山門及び脇塔・梵音寺本堂）



photo: Akihiko Mizuno/Hiroshi Yoshida

蓮教寺

『尾張名所図会』の姿を残す、黄金の本堂

光り輝く蓮教寺

黄昏時のお寺は、いわく言い難い郷愁を誘います。

法雲山蓮教寺は、名古屋東部に広がる牧野池近くの住宅地の丘にあり、夕暮れになると境内は茜色に染まります。その時、本堂の中は夕日と莊嚴が混じり合って黄金に輝き、極楽浄土を思わせる空間が現れます。

地元ではその美しさがわらべ唄となり「ひかりがやがくれんきょうじ」と歌われました。



本堂の外観。シンプルな構成が美しい

牧野池と蓮教寺

蓮教寺の創建は10世紀に遡ります。創建当時は天台宗でしたが、13世紀ごろに兵火に遭い焼失したといいます。その後、浄土真宗に改宗し、名称を法雲山蓮教寺と改めて、18世紀初頭に現在地へ移りました。

また、かつてこの辺りはやせた土地で、蓮教寺の堂宇も藁葺きだったと伝わっています。それが江戸時代になって灌漑用の牧野池が造られると、田んぼが開かれて米ができる土地になり、池には渡り鳥が飛来して尾張徳川家の御鷹狩場ともなりました。松平家と婚姻関係にあった蓮教寺もこの頃から発展し、尾張徳川家の繋がりも得ました。現存する書院は、貴賓を迎える上段の間を設け、内装も上質な作りとなっています。



正面に大きな床を構える書院

『尾張名所図会』の姿を残す境内

蓮教寺の魅力のひとつが、江戸末期に描かれた「尾張名所図会」の境内の姿をほぼそのまま残していることです。図会には、牧野池のすぐ近くで、のどかに広がる田んぼから丘を登った先に山門を開く蓮教寺の姿が描かれています。

重厚な瓦屋根の山門には猿や獅子の彫刻があり、柱間上部には透かし彫りの装飾が施されています。ただ、門をくぐると、正面に見える本堂の姿に少し拍子抜けするかもしれません。門の立派さに比べると、少しこざつぱりと見えるからです。装飾や彫刻はほとんどなく、障子と袖壁の白色がより簡素な印象を与えます。

本堂に足を踏み入れると、畳の敷かれた外陣のすぐ目の前に内陣が迫り、金箔の押された柱や梁、欄間、それに極彩色の組物があります。南西を向いた本堂には夕日が差し込み、外陣の畳がそれをバウンスさせ、内陣の装飾を輝かす間接照明のような役割を果たします。この工夫が黄金の時間を演出しています。本堂を手掛けたのは尾張の名工伊藤平左衛門五世で、当時の棟梁は設計から施工管理まで行う優れた建築家でした。蓮教寺本堂は、名工が手掛けた現存する古い遺構のひとつです。

黄昏のノスタルジア

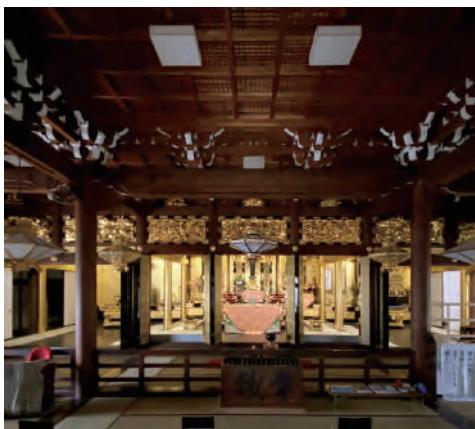
田んぼの広がるのどかな風景も今では住宅地となり、蓮教寺や牧野池の歴史を知る近隣住民も少なくなりました。ただ、境内から眺める黄昏に沈む街並みは、今も変わらず心を揺さぶります。



丘を登った先にある重厚な山門

本堂／1758年 書院・山門／1812年
木造平屋建て
棟梁本堂／伊藤平左衛門五世
名古屋市名東区高針四丁目864
<http://www.renkyouji.com>

登録／2011年1月
登録基準／造形の規範となっているもの(本堂)



本堂内観。虹梁の上にのる組物に注目

浄土真宗のお堂

宗の念佛道場として使用し、高弟の性信房が受け継いで再建されました。ちなみに報光寺の山号と名称は、性信房の開山した高龍山報恩寺に基づいて改称されたものです。

報光寺を訪れてまず目に飛び込んでくるのが、立派な楼門のある山門です。楼門とは2階のある門のこと、両脇には山廊が付いています。この楼門は小牧の正眼寺から譲り受けたもので、明治9年に移築されました。

報光寺は、内陣や余間の壁面、欄間などが金箔で美しく飾られています。興味深いのが、壁側と内側で柱の数が違うことです。これは広い空間を確保するための工夫で、減らした柱の負担は虹梁の上に載る組物で補っています。また、壁面を強固にすることで、大屋根の軒先を支える構造的な工夫もなされています。ツクの見方としては、堂内から広縁に至るまで丸柱で構成されていることも、由緒あるお寺に許された特徴です。

尾張の名工伊藤平左衛門

本堂の大膽な構成は、尾張の名工伊藤平左衛門によるものと考えられています。実は報

門をくぐると、大きな屋根の本堂が迫ります。屋根の軒下が広々と吹き放たれていて、まるで屋根が浮き上がっているかのようです。淨土真宗では聞法という仏法を聞く行為を大切にしており、法話が行われる日になると多くの門徒が詰めかけます。そのため、大きな本堂が必要となり、堂内から溢れた人々のために軒下空間が広げられたといいます。広縁と落縁の幅は4・4m、軒先まで含めると優に6mを超える軒下空間です。

堂内は浄土真宗の平面形式が踏襲され、内陣や余間の壁面、欄間などが金箔で美しく飾られています。興味深いのが、壁側と内側で柱の数が違うことです。これは広い空間を確保するための工夫で、減らした柱の負担は虹梁の上に載る組物で補っています。また、壁面を強固にすることで、大屋根の軒先を支える構造的な工夫もなされています。

ツクの見方としては、堂内から広縁に至るまで丸柱で構成されていることも、由緒あるお寺に許された特徴です。



広縁と落縁。その際に立つ丸柱

1855年
木造平屋建て
〔設計〕伊藤平左衛門七世、八世
江南市古知野町本郷1-14



本堂正面。軒下の空間が広々と透けていてとても気持ちいい

報光寺

名工伊藤平左衛門が手掛けた、大屋根の浮かび上がるお堂

浮き上がる大屋根

日本建築の魅力のひとつに、大きな屋根と深い軒下空間があります。報光寺の本堂は、その空間を巧みに活用した豪壮なお堂です。高雲山報光寺は、名鉄犬山線の江南駅から西北へ300m程の細い街道に面して境内を構えています。かつてこのあたりは、いくつもの街道が交差する賑やかな町場でした。創建は852年、天台宗円仁が開基したと伝えられています。その後廢寺となります。1232年に親鸞聖人がこの地を訪れ浄土真



山門。2階建ての楼門は市指定文化財

登録／2015年11月
登録基準／造形の規範となっているもの(本堂)



西門から東門へ通り抜けの路地を見る

崇覚寺と名古屋別院

崇覚寺は山号を長嶋山といい、元は三重県桑名市の長島に建立されました。創立は水谷右衛門重直と伝わり、石山合戦で戦死した父安養坊と同じく東本願寺の教如上人に弟子入りして、同地に寺を開いたといいます。

江戸時代になると、名古屋の城下町整備にあわせて現在の西区堀詰辺りに移転し、東本願寺名古屋別院の建立に尽力。1713年、名古屋別院の完成に伴い現在地に移転しました。

江戸時代が終わり、明治の世になつてからも東本願寺の勢いは衰えることはなく、緑日

興味深いのは、この本堂の平面が微妙に左右対称ではないこと。外陣と矢来内の脇のズレに気が付かなければ見逃してしまうほどの微妙な差です。理由はわかりませんが、このズレのために構造が複雑になつており、そこに何らかの意図があつたことを伺わせます。

路地の美を守るもの

江戸時代が終わり、明治の世になつてからも東本願寺の勢いは衰えることはなく、緑日

た。移転に際して、本堂は名古屋別院の余材で造られたとも伝わっています。

現在の本堂は、江戸末期の1866年に再建されたもので、尾張の名工伊藤平左衛門八世が手掛けました。『尾張名所図会』などに描かれた境内のようすから、東西に細長い敷地の両側に門を開き、北側に本堂や庫裏を寄せて、南側を庭にしていましたことがわかります。これは現在の配置とほぼ変わっていません。

本堂の正面は庭を向き、向拝を路地へと伸ばしています。堂内は浄土真宗の平面形式にない、内陣と外陣の間には矢来内があり、内陣の両脇には余間を備えています。内陣の須弥壇や余間の仏壇、欄間に金箔が押され、美しく飾られています。

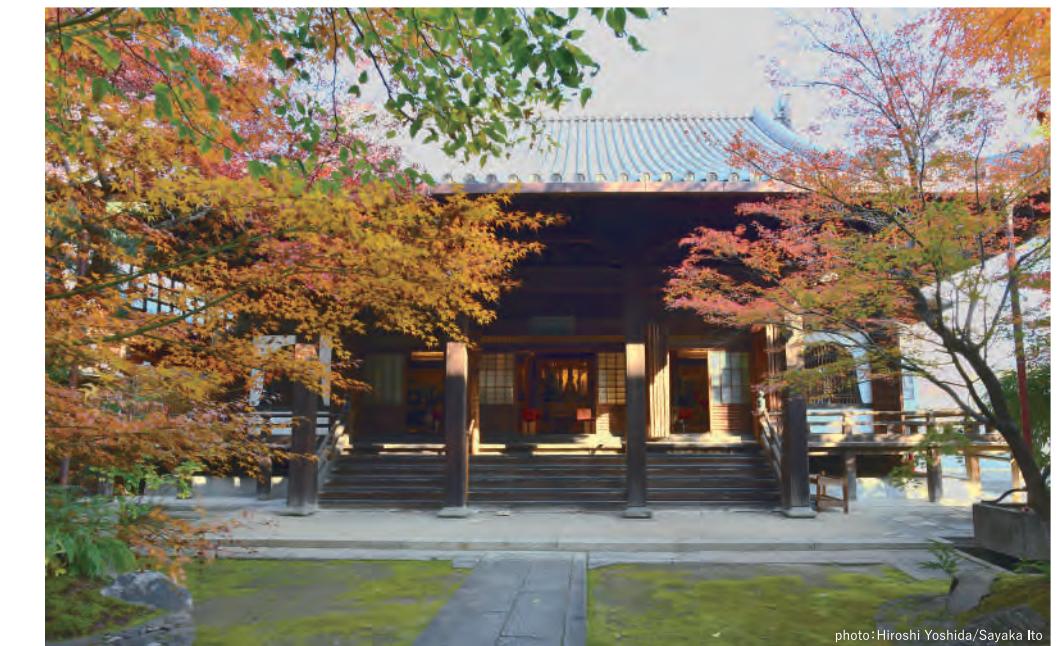
興味深いのは、この本堂の平面が微妙に左右対称ではないこと。外陣と矢来内の脇のズレに気が付かなければ見逃してしまうほどの微妙な差です。理由はわかりませんが、このズレのために構造が複雑になつており、そこに何らかの意図があつたことを伺わせます。

興味深いのは、この本堂の平面が微妙に左右対称ではないこと。外陣と矢来内の脇のズレに気が付かなければ見逃してしまうほどの微妙な差です。理由はわかりませんが、このズレのために構造が複雑になつており、そこに何らかの意図があつたことを伺わせます。

木造平屋建て
設計：伊藤平左衛門八世
名古屋市中区橘2-6-1
37



登録文化財の名古屋別院東門も伊藤平左衛門八世の作



本堂を見る。苔、紅葉、本堂のコントラストがなんとも美しい

そう がく じ 崇覚寺

まちの喧騒に紛れ込んだ、美しい路地のあるお寺

名古屋の小京都

崇覚寺は、名古屋の都心に美しい路地を開くお寺です。晚秋の頃は、苔庭に色とりどりの紅葉が映え、静かに佇むお堂の中では荘厳がきらりと輝く、まるで京都の名刹のような風情です。

すぐ側には東本願寺名古屋別院の境内が広がり、周囲を22号線と大津通、高架の名古屋高速が走る騒がしい一角に、崇覚寺の境内があります。



堂内の荘嚴。庭にいても輝きを感じる



県指定文化財の御靈屋と唐門

たが、1785年の火災で殆どの建物を焼失しました。総門や山門は焼け残りましたが、本堂や靈廟はその後に再建されたものです。

靈廟は御靈屋といい、明治5年に四宇の靈廟が藩祖義直の御靈屋に合祀されて本堂の奥に祀られています。御靈屋は、本殿と拝殿を合の間で繋ぐ構成で、柱や梁、組物まで極彩色塗られています。普段は大きな本堂の影に隠れ、また退色防止の覆屋が付いているため、その姿を見ることはできません。

徳興殿という木造の大きな建物があります。名古屋商工会議所の事務所として建てられ、昭和9年に建中寺に移築されました。また、建設当初に工事を担当した清水満之助は清水建設の前身となる清水店の三代目で、他の候補者には伊藤平左衛門も挙がっていました。

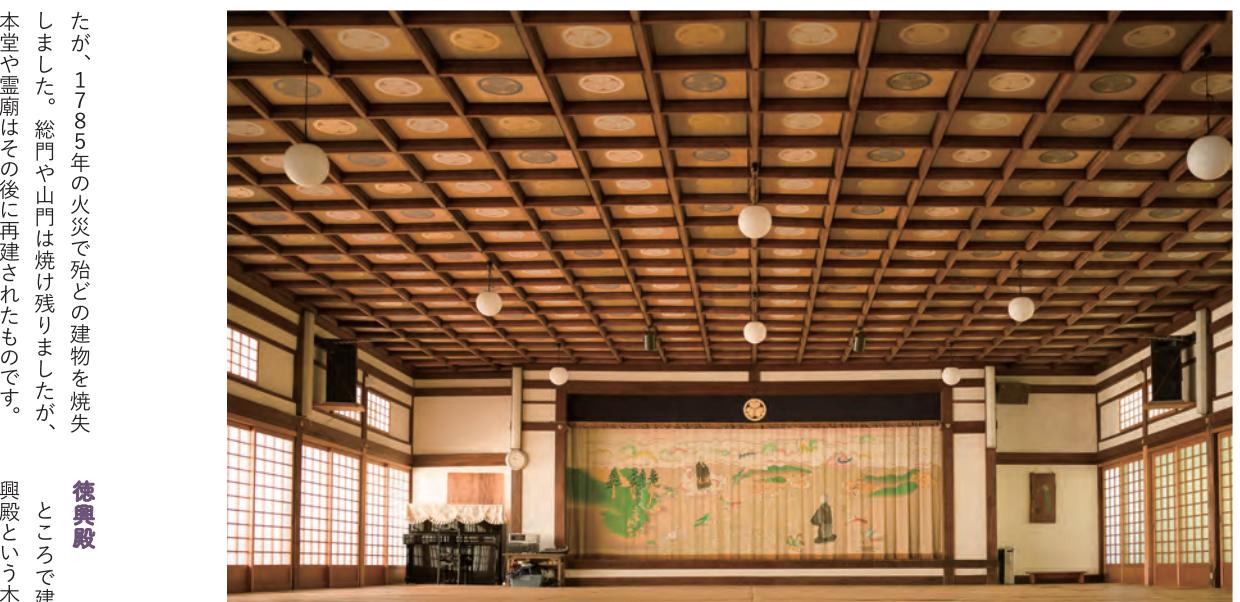
徳興殿の移築に際しては、当時の住職椎尾弁匡が関与したと考えられています。椎尾は僧侶だけでなく仏教学者の肩書を持ち、参議院議員も務めた人物で、名古屋の財界人とも繋がりが深かったといいます。

徳興殿の魅力はなんといっても2階の大広間にあります。幅10m、奥行き20mの12×5畳におよぶ無柱空間は、木造とは思えないiskeel感です。格天井の幾何学的な構成も、どこまでも広がるような印象を与えます。もうひとつ空間を彩るエッセンスが、両脇に控える廊下から取り込まれた光です。この光が障子を背面から照らし、大広間へ拡散され、室内に不思議な浮遊感を与えています。

また、大広間に目を奪われがちになりますが、2階へ至る階段の手すりなどの控えめな装飾も隠れた見どころです。

徳興殿

ところで建中寺の境内には、お堂の他に徳



徳興殿の内観。木造とは思えないスケールの大きな空間で、小屋組みはトラスと思われる

photo:Hisao Takeuchi

けんちゅうじとうこうでん 建中寺徳興殿

尾張徳川家の菩提寺に移された、旧商工会議所の事務所



徳興殿外観。敷地の奥まった場所にたつ

尾張徳川家の菩提寺

徳興山建中寺は、国道19号線から少し入った落ち着いた街中になります。近くには筒井小学校や東海中学・高校があり、総門前に連なる筒井町商店街は、今も下町の情緒を色濃く残しています。

建中寺は、1651年に尾張藩主二代目の徳川光友が父義直を弔うために創建した尾張徳川家の菩提寺です。広い境内には靈廟をはじめ本堂や書院など多くの堂宇があります。

みんなのお寺

建中寺は戦後名古屋の復興計画のおりに、境内地の多くが割譲されました。広大な敷地は5分の1になりました。また総門から山門にいたる参道は公園となり、建中寺とは車道で切斷されて、往時の雰囲気はかなり薄れてしましました。

ですが、公園には近隣の学生や子どもたちがたくさん集まり、元気にしています。声がいつも響いています。

建中寺は、今ではすっかり地域に馴染んだみんなのお寺になっています。



市指定文化財の建中寺本堂。大きな屋根が青空に映える

1896年(明治29年)・1934年(昭和9年)移築
木造2階建て
「設計」不明(工事／清水満之助)
名古屋市東区筒井1-7-03-1
<http://www.kenchūji.com>

伊藤平左衛門と 竹中家



【近世から現代まで活躍する尾張の名工たち】

皆さんは、大工と棟梁の違いをご存知でしょうか？大工とは、古代律令時代の建築技術官の最高位をいい、一方の棟梁は、室町時代以降に特定の工事の長として使用され始めたと言われています。

尾張には古くから熱田神宮の造営を行ってきた工匠がいて、織田信長の安土城築城にも腕をふるったといいます。また絢爛豪華な日光東照宮の建設には、全国各地の名工たちが江戸に集結し、腕を競い合いました。

尾張の名工伊藤平左衛門と竹中家が登場したのもこの頃で、竹中家については、名古屋城の造営に関わったとみられる痕跡が残されています。両家ともに、現存する社寺建築から優れた技量の持ち主だったことは分かっていますが、その一方では未発見の遺構も多く、研究が進んでいるとは言えない状況にあります。

近年、工匠たちの業績が再評価され、2020年には国立近現代建築資料館で「工匠と近代化」という展覧会も開催されました。そこで紹介された控帳（スケッチブック）からは、工匠たちが好奇心旺盛で教養の高い文化人だったことが伺えます。

近代になると、伊藤平左衛門は京都で明治期最大の木造建築の東本願寺御影堂を手掛け、大工の頂点となり、また竹中家の竹中藤五郎は神戸に支社を興して、竹中工務店の礎を築きました。



東本願寺御影堂

教会

キリスト教の最古の教会は住宅の広間だったという。

そこへ信者が集まり、祈りを捧げる場が形成された。

その後、ローマ帝国に公認され使用された集会所「バシリカ」が、

現在の教会堂の起源となっている。



正面大窓のステンドグラス。図像は音楽の聖人セシリア

大聖堂のできるまで

昭和36年、名古屋に司教区が置かれると、それにあわせて大聖堂の建設の計画が持ち上がります。建設予定地は戦災復興計画で整備された南北に細長い敷地だったため、南に正面を向いた教会堂となりました。大聖堂建設に携わった初代司教の松岡孫四

古屋カテドラル聖ペトロ聖パウロ大聖堂といい、中部地区の司教座がある中心的な教会です。カテドラルとは司教の座る椅子カテドラから転じた名称で、日本では大聖堂と意識されています。

Catholic Nunoikekyōkai

登録／2015年8月
登録基準／造形の規範となっているもの
(名古屋カーラル聖ペトロ
聖パウロ大聖堂)

1961年(昭和36年)
尖塔部および内陣／鉄筋コンクリート造、
身廊部／鉄骨鉄筋コンクリート造
【設計】山下寿郎設計事務所
名古屋市東区葵1-12-3
<http://nunoike-nagoya-diocese.org>

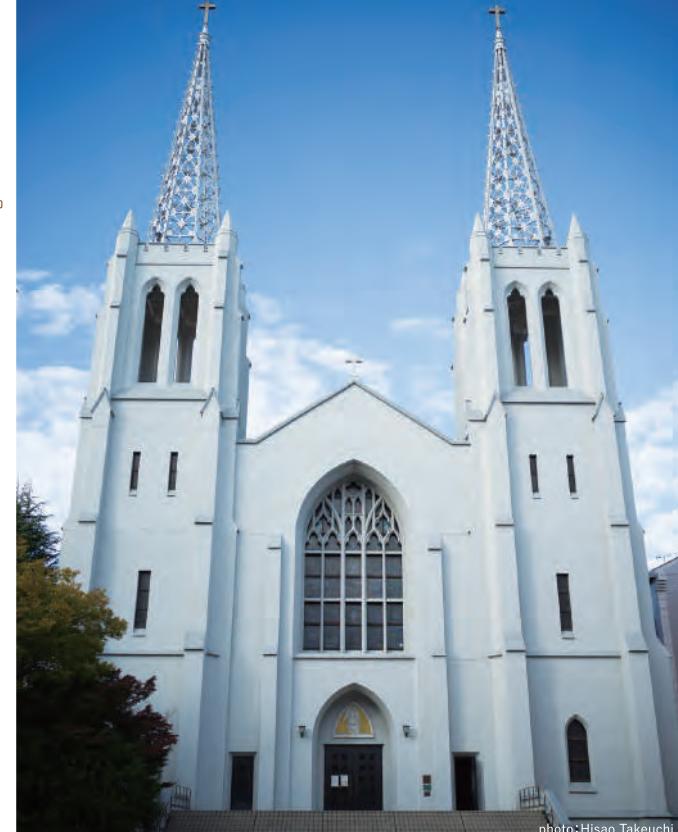


photo: Hisao Takeuchi

装飾の少ない抽象的なゴシック様式風の外観。塔の上部には左右で大きな違う鐘が釣られている

カトリック布池教会

パイプオルガンの響く、現代のゴシック建築風大聖堂

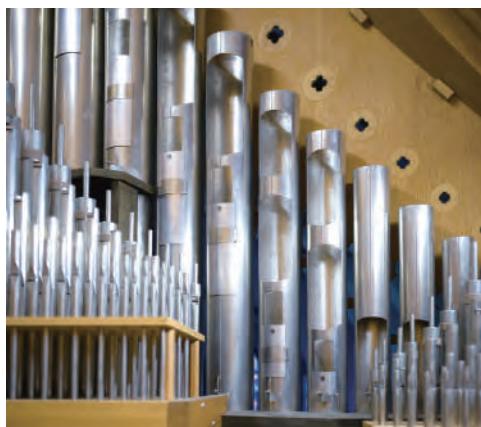
郎は、出身地長崎の伊王島で馬込教会堂を手掛けた人物で、布池教会の設計にも熱心だったと言います。その熱意に応えたのが、山下寿郎設計事務所の副社長今井猛雄でした。今井は異色の名建築家今井兼次の実弟で、後に日本設計を立ち上げました。

近代的なゴシック大聖堂

カトリック布池教会のデザインモチーフになっているのが、中世ヨーロッパのゴシック様式です。外観の2本の尖塔と、正面上部に大窓のあるかたちは、その様式を踏襲したもののです。尖塔の高さは約50mあり、また現在は白く塗られていますが、以前はコンクリート打ち放し仕上げでした。

大階段を上って堂内に足を踏み入れると、先の尖ったポイントドアーチが連続する大きな空間が広がります。一番奥が祭壇と司教座のある内陣で、壁面上部には青色のステンドグラスが嵌められています。ステンドグラスは、字の読めない信者のために形づくられた図像の役割があり、内陣にはイエスが、身廊側面には7つの秘跡が現されています。

また、入り口の上階には大きなパイプオルガンがあり、正面の大窓のステンドグラスを



全2422本のパイプで構成されるパイプオルガン

遮らないように左右に分かれています。パイプオルガンは小さな住宅ほどの大きさがあり、大小さまざまなパイプが風を通して荘厳な音を奏でています。

平日の午後、南西から差し込む光がステンドグラスを透過して、聖堂に色とりどりの光を落とす頃、パイプオルガンの練習が始まります。木製のベンチでは信者が祈りを捧げ、光の中で荘厳な音色が鳴り響きます。ヨーロッパで当たり前にある大聖堂の日常の姿がここにはあるのです。



聖堂内観。鮮やかな彩りのステンドグラスが美しい

街角の大聖堂

カトリック布池教会は、五感を揺さぶる感動的な瞬間に出会える大聖堂です。

かつて尾張徳川家の御下屋敷のあった布池には、カトリック名古屋教区の施設が集まる一角があり、そこに2本の尖塔を掲げたゴシック建築風の大聖堂があります。正式名称は名

登録／2010年4月
登録基準／造形の規範となっているもの（礼拝堂）



photo: Hiroshi Yoshida

瀬戸永泉教会

瀬戸川のほとりの、歴史ある教会堂

瀬戸に教会ができるまで
焼き物のまち瀬戸の中心を流れる瀬戸川のかたわらに、瓦屋根で黒い下見板張りの教会がひつそりとたっています。愛知県内で古い歴史を持つ、プロテスタント系の瀬戸永泉教会です。民家の建て込んだ場所にあり、車通りの多い川沿いの道路からでは見過ごしてしまくくらい街並みに溶け込んでいます。

プロテスタント系のキリスト教が名古屋とその周辺で布教を始めたのは明治10年ごろ。そこで布教を始めたのは明治10年ごろ。



外観を見る。ポインテッドアーチ風の窓に注目



トラスのディテール。中心の束を上下2本の貫が繋ぐ

瀬戸への伝道は、同11年に水野村東光寺で開催された聖書配布と講義が始まりと言われています。

陶磁器の一大産地とはいえた瀬戸の職工たちの生活は苦しく、また気性も荒かつたため、彼らへの教義の伝達は難航したといいます。加えて、いまだキリスト教に対する排斥は根強く、他宗教との軋轢も絶えない状況が続いていました。

教会堂が建設されたのは明治33年のこと。建設費の半額は信者らの献金や茶葉の制作、日講堂の売却などで捻出したといいます。永泉教会の簡素な姿は、そんな背景とも無関係ではありません。

外観を見ると、切妻屋根には瓦が載り、下見板張りの壁面には縦長の窓が規則正しく並んでいます。よく見ると窓のアーチが少し尖り、ゴシック様式で用いられるポインテッドアーチ風になっています。建設当初はアーチではなく、長方形の窓に外開きの鎧戸が付いていました。



郷愁を誘う色合いの小窓

モダンな礼拝堂

教会堂が建設されたのは明治33年のこと。

建設費の半額は信者らの献金や茶葉の制作、日講堂の売却などで捻出したといいます。永泉教会の簡素な姿は、そんな背景とも無関係ではありません。

外観を見ると、切妻屋根には瓦が載り、下見板張りの壁面には縦長の窓が規則正しく並んでいます。よく見ると窓のアーチが少し尖り、ゴシック様式で用いられるポインテッドアーチ風になっています。建設当初はアーチではなく、長方形の窓に外開きの鎧戸が付いていました。

僅かな飾りのもたらすもの

この教会にはもうひとつ、建物を特徴づけるデザインがあります。それは正面の玄関ポーチの上にある六角形の小窓です。小窓には色ガラスが嵌まり、午後になると堂内を緑や青の光がゆっくり流れていきます。後の改築で空けられた窓ですが、とても見事なデザインです。

毎年11月の永眠者記念日になると、永泉教会に関わりのあった故人の写真が持ち寄られ、亡くなつた人を偲びます。壁にかけられた写真を小窓から射す光がなぞるとき、言葉にできない感動を覚えます。それは、まことに根を下ろした教会の営みを思い起こさせるからなのかもしれません。

礼拝堂に入ると、モダンで美しい空間に目を見張ります。壁面の白い漆喰とむき出しのトラスの小屋組みが程よい緊張感を保ち、両側に開けられた窓のおかげでとても明るいです。以前は正面の祭壇の後ろにポインテッドアーチ形のフレームがあり、窓のかたちとも響き合っていました。

小屋組みのトラスをよく見ると、束の部分に貫が2本通り、トラス同士を連結している。一般的にトラスは明治24年の濃尾地震以降に普及したといわれ、それを和小屋の構造で補強した面白い工夫です。

1900年 明治33年
木造平屋建て
〔設計〕不明
瀬戸市杉塚町5



光の十字架が浮かび上がる礼拝堂。鉄トラスにも注目

で、礼拝は徳川園前の中京法律学校の教室を借りて行つたと言います。

浮かび上がる十字架

念願の教会堂が再建されたのは昭和28年。まちは戦後復興で賑わいを取り戻しつつあり、新しい敷地への移転が難航したため、旧教

会堂の跡地に建てられることになりました。

設計を担当したのは、明治末期に近江八幡に事務所を構え、関西を中心に800棟以上の

建物を手掛けた、ヴォーリズ建築事務所です。

教会堂の外観を見ると、礼拝堂は道路に面した西側を壁にして、ラテン十字形の窓を嵌めています。午後になると、この窓からは明るい光が差し込みます。日本の建物は西日を避ける傾向にありますが、上手にあつかうことで、ドラマティックな光を得ることができます。

堂内へは敷地の奥にある塔屋の玄関から入ります。トンガリ屋根の塔に上るような気のする、楽しい入り口です。

礼拝堂に入つてまず目を奪われるのが、浮かび上がる光の十字架です。よく見ると十字架の枠だけ琥珀色のガラスがはめられ、フレームで強調された光はいつそう輝いて見えます。

また、深い天井に架かる特徴的な鉄トラスも十字架への視線を妨げず、背の高い腰壁も木製のベンチと合わせて空間の重心を落として、浮かび上がる十字架を引き立てています。

これら空間の演出は、ヴォーリズが設計の際に重視した光への強い思いに基づいています。



塔屋の上の十字架を支える芯柱



赤い屋根と緑のトンガリ屋根が目を引く外観。壁面のラテン十字形の窓がポイント

photo:minachom

日本福音ルーテル復活教会

穏やかな街並みにある、十字架の浮かぶ教会堂

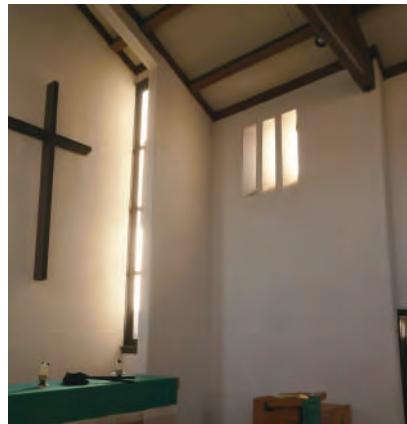
かわいい教会

徳川美術館の黒門を通り過ぎ、登録文化財の徳川園堀に沿つて緩やかに下る道を進んでいくと、緑色のトンガリ帽子の塔の付いた赤い屋根のルーテル復活教会があります。道路に面したラテン十字形のガラス窓と、鮮やかな色の屋根が目を引いて、近所の人たちからは「かわいい教会」と親しまれています。プロテスタント系の日本福音ルーテル教会が大曾根を拠点に伝道を始めたのは昭和3年のこと。その後、現在の教会堂のたつ場所に最初の大曾根教会が出来上がりました。ところが太平洋戦争のさなか、名古屋大空襲で教会堂は罹災し、閉鎖に追い込まれます。大曾根教会が再開されたのは終戦から5年後



塔屋を見上げる。2階には小さな部屋がある

1953年(昭和28年)
木造平屋建て・塔屋2階建て
「設計」ヴォーリズ建築事務所
名古屋市東区徳川町2-30-3
<http://jelc-fukkatsu.sakura.ne.jp>



内陣の聖壇のスリットと壁上部の小窓

ルーテル岡崎教会を設計したヴォーリズ建築事務所は、そんな光のあつかいに長けた、日本の近代建築でも指折りの事務所です。

ヴォーリズ建築の美

日本福音ルーテル教会が岡崎の伝道を始めたのは昭和27年のことで、教会堂の建設も同時に進められました。設計を担当したヴォーリズ建築事務所のW・M・ヴォーリズは、伝道を目的に来日したアメリカ人で、メンソレータムなど輸入品を販売する近江兄弟社を興し、社会活動を通して布教に務めました。建築事務所もその一環で

立ち上げられたものです。また宣教師たちとの交流から、教会堂やミッション系の学校を多く手掛けました。

ルーテル岡崎教会は、白いスタッコ仕上げの壁に赤い桟瓦が載る、アメリカのコロニアルスタイルの教会堂を思わせます。また、外観で目を引くのが、屋根の上に載る背の高い塔です。先端には十字架が掲げられ、設計段階では鐘楼などの案も検討されていました。

かつては引き戸だった入り口扉を開けると、白い礼拝堂がすぐ目の前に広がります。天井の高い身廊には木製のベンチが並び、その両脇には、パーテーションで区分けできる側廊があります。堂内の窓には木製のサッシが残り、柔らかい表情を与えています。

正面奥の内陣に近づくと、引き込んだ聖壇の両脇にスリット状の細い窓があることに気が付きます。また壁面上部にも斜めに穿たれた3つの小窓があり、採光に心を配っていることが分かります。

夕暮れ時、内陣右側から入る夕日が聖壇上部のスリットや高窓から差し込んで、礼拝堂を緋色に染め上げます。白い壁面で拡散された光がエーテルのように全体に染み渡る光景に、思わず陶然となります。



photo:Hitoshi Kumamoto/Sayaka Ito

身廊から聖壇のある内陣を見る。夕日に染まる堂内が美しい

日本福音ルーテル岡崎教会

寺町に紛れ込んだ、夕焼けの教会堂

夕日に満たされる教会

ルーテル岡崎教会は、黄昏時の礼拝堂が夕日で満たされる、美しい教会堂です。

キリスト教の教会堂は、光のあつかい方に特徴があります。ゴシック建築のステンドグラスしかしり、ルネサンス建築のドーム頂部のクーボラしかしり。また近代建築の教会堂にも、光を美しくあつかった名作が数多くあります。



アメリカのコロニアルスタイルを思わせる外観



ピッタリ収まる小さい洗面台

1953年(昭和28年)
木造平屋建て(一部2階)
[設計]ヴォーリズ建築事務所
岡崎市伝馬通4-54



大明寺聖パウロ教会堂の内観。軽やかなコウモリ天井

で、構造はレンガ造と木造の混構造となっています。
圧巻なのは内部空間。暗い礼拝堂内には
ステンドグラスの鮮やかな光が縦横に浮か
び上がり、バラ窓や天井の交差リヴ・ヴォー
ルトなど典型的な西洋のゴシック建築の要素
が散りばめられています。



大明寺聖パウロ教会堂の外観。鐘楼は後の増築

教会堂では結婚式を挙げることもでき、社
会見学で来館した子どもたちにも大人気の建
物で、堂内にはいつも歓声が響いています。

大明寺聖パウロ教会堂

この教会堂は、明治12年に長崎の伊王島に
建てられました。一見すると和風の建物に見
えますが、足を踏み入れると軽やかな交差
リヴ・ヴォールト天井に驚きます。長崎では、
コウモリ傘の骨に似ていることからコウモリ
天井と呼んでいたそうです。また、内陣の右



明治村といえば
牛鍋が有名ですが、
聖ザビエル天主堂近くの
レストラン「浪漫亭」の
オムライスアイスも
とってもオススメですよ♪

側にはフランスの巡礼地のルルドの洞窟が再
現されています。小ぶりな建物ですが、味わ
いのある教会堂です。



聖ザビエル天主堂の外観の眺め。当初はかなり無茶な構造でつくられていたという

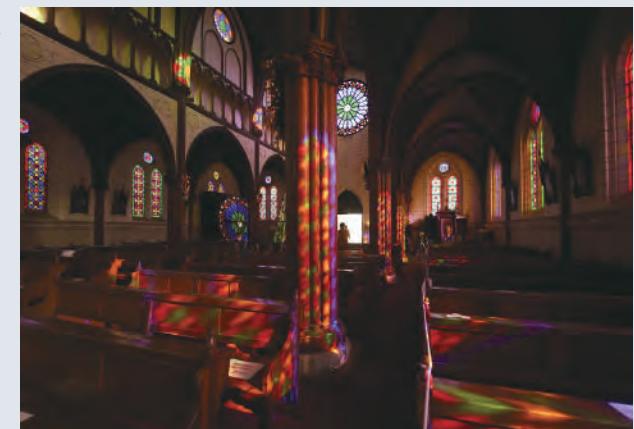
photo:Hirosi Kumamoto

特集 3

博物館明治村の教会堂

聖ザビエル天主堂

近代建築の宝庫、博物館明治村にも美しい
教会堂があります。その3件はいずれも登録
文化財や重要文化財となっています。
聖ザビエル天主堂は、明治23年に京都市中
京区でフランシスコ・ザビエルを記念して献堂
されました。白い外観は漆喰が塗られたもの



聖ザビエル天主堂内観。ステンドグラスの光がとても美しい



column

神言神学院の 聖堂

しん げん しん がく いん

【アントニン・レーモンドが手掛けた、コンクリートの教会堂】

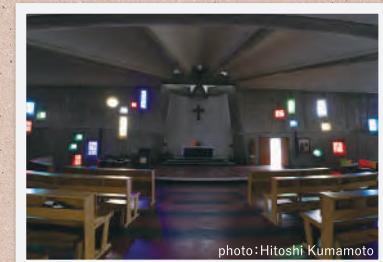
名古屋には、まだ文化財にはなっていない、とても素晴らしい教会堂があります。それが神言神学院の聖堂です。設計は、日本の近代建築に偉大な足跡を残した、チェコ出身の建築家アントニン・レーモンドです。

神言神学院は、キリスト教カトリック派の聖職者を育てる学校で、場所は名古屋市昭和区にある南山大学に隣接しています。ちなみに南山大学校舎もレーモンドの作品です。（「あいちのたてもの まなびや編」参照）

丘陵の上にある神言神学院は、少し離れた場所からでも聖堂の尖塔が見え、コンクリート打ち放し仕上げの独特な造形が目を引きます。聖堂は口の字形に配置された修室や食堂、集会室に囲われています。このような配置は、キリスト教の修道院に古くからみられる形式です。

聖堂内部は、コンクリートの重厚な空間に色とりどりの光が浮かび、とても幻想的です。扇状の平面は尖塔が立ち上がる内陣に収斂され、上部は大きな吹き抜けになっていて、ところどころ明り採りの窓が切られています。コンクリートのダイナミックな造形に僅かな光が引き込まれ、厳肅な雰囲気をたたえています。また地下聖堂の天井も力強い造形が見どころです。

神言神学院の聖堂は、コンクリートの造形美を追求したレーモンドの真髄が味わえる、モダニズム建築の傑作です。



聖ヨハネ教会の内観。袖部のステンドグラスから光がたっぷり入り、堂内はとても明るい



屋根とレンガのコントラスト、賑やかな装飾が楽しい外観

最後に、重要文化財の聖ヨハネ教会を紹介しましょう。この教会は明治40年に京都市下京区に建てられました。正面の左右には尖塔が立ち、柱型やアーチ窓などレンガの表情が豊かなロマネスク様式風の外観が特徴です。2階の礼拝堂も必見です。塔内の階段を登れば、両袖の大きなステンドグラスがたっぷりと光を取り込み、二つの塗られた竹のすだれの天井が光を反射して、堂内は驚くほど明るく感じます。

これら明治村に集められた建物は、ほとんどが所有者から寄贈されました。移築に際しては短い期間での調査と解体作業に追われ、再建時も大変な苦労がありました。そのノウハウが、現在の近代建築の保存や修復へと生かされています。

聖ヨハネ教会堂

設計者のガーディナーは、立教学校（後の立教大学）の校長を務め

会堂を紹介しましょう。この教会の後建築家としても活躍しました。

それぞれの教会堂は入鹿池を望む眺めの良い場所にあり、幸せな余生を過ごしています。



あいちのたてもの博覧会と online あいたて博

普段は立ち入ることのできない建物に足を踏み入れ、美しい室内装飾を眺め、そして解説を通じてまちの歴史に触れたとき、何気ない風景がきっと鮮やかに見えてくるはずです。そんな「あいちのたてもの博覧会」を、ぜひ楽しんでみてください。

愛知県では秋になると、国登録有形文化財の建物を特別公開するイベント「あいちのたてもの博覧会」を開催しています。

公開する建物は、本書で紹介した神社、寺院、教会に、産業にまつわる建物や学校、また名古屋テレビ塔のようなまちのシンボルなど多岐に渡り、毎年多くの人が参加しています。

2020年は、新型コロナウイルスの影響で大規模な開催は自粛しましたが、インターネットで参加できる「online あいたて博」で、動画の配信も始めました。

いずれも、それぞれの建物やまちに思いの深いガイドが丁寧に解説し、その魅力を紹介しています。

*「あいたて博」は10・11月の土・日曜日を予定しています。また「online あいたて博」は愛知登文会のホームページからYouTubeチャンネルで観覧いただけます。

飯田喜四郎先生 特別インタビュー

文化財としての祈りの場

今回も充実した内容になりましたね。取り上げられた建物はどれも面白いものばかりでした。

神社については、角南さんが手掛けた真清田神社や安久美神戸神明社は、全部をひとつの大マス(塊)にまとめながらも、社殿の古い名前を残し、あいかわらず別々に分けられていて、とても上手い。彼の功績だと思います。

それと、知立神社の養正館に明治天皇が来館した逸話や、旧羽田八幡宮文庫の歴史なども、本当に面白いです。

教会については、瀬戸永泉教会が素朴で非常に良いですね。無理して真似をしていないのが特に良い。それにヴォーリズが手掛けた日本福音ルーテル教会のふたつは光の扱いが上手で、それぞれにちゃんと個性があります。

カトリック布池教会は、シャルトル大聖堂の真似をしているのだろうと思いませんが、ゴシック建築と比べると細部がかなり違います(笑)

私はお寺については詳しくないの

ですが、寂光院の隨求堂は素晴らしいと思うし、建中寺の徳興殿は他にはない珍しい建物だと思います。余談ですが、伊藤平左衛門十二世は東大の先輩で、私がフランスに留学に行くときに写真の撮り方を教えてくれて、カメラも一台もらいました。

近世の寺院は明治村には一棟もないのですが、当時は、その分野の調査や研究がほとんど進んでいなかつた。取り壊されてしまった名建築もあったのだろうと思います。

随分前になりますが、私は名古屋大学を退官後に、第61回式年遷宮のため伊勢神宮の當鑄部長を3年間務めていたことがあります。そのときに、建築側と神職側とで考え方が全く違うことを強く感じました。

防災上の設備なども、彼らからすると神の空間には置きたくないわけです。また、意匠的に後年の変更から古い形式に戻そうとしても、現行の信仰に関わる部分については受け入れら

れませんでした。
古い建物は歴史を経ることで、他に代わるものはない文化財となります。そういう建物を残していくには、今日本では行政などの公共団体と組む必要があります。ですから、この冊子の

方を提示して、彼らと協力していくことがとても大切になります。

それは、ヨーロッパがやっていることに習い、それを引き継いで、100年

後、2000年後を見据えて文化を育てていくことへと繋がっています。

その意味でも、長い歴史を持つ「いのりのば」の建物たちは、今も建築文化の重要な一翼を担っているのです。



飯田 喜四郎

1924年東京生まれ。名古屋大学名誉教授。東京大学在学中にフランスへ留学。また博物館明治村の館長を長年務めた。

国登録有形文化財とは

平成8年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、文化財登録原簿に登録された有形文化財のことです。

それまでは文化財指定制度に基づく重要文化財（その中でも、世界文化の見地から価値の高いものが国宝）が指定され、貴重な建物が手厚く保護されてきましたが、その数は多くなく、急激な都市化の進展などにより、近代の建造物がその建築史的・文化的意義や価値を十分に認識されないまま取り壊される例が相次ぎました。それを決定づけたのが平成7年の阪神・淡路大震災です。震災による被害を受けた多くの未指定文化財が取り壊されてしまいました。

その反省にたち、国レベルで重要なものを厳選する重要文化財指定制度を補い、より緩やかな規制のもとで、幅広く保護していく制度として文化財登録制度が創設されたのです。

登録の基準は、原則として建設後50年を経

- 過したものの中、
- ①国土の歴史的景観に寄与しているもの
- ②造形の規範となっているもの
- ③再現することが容易でないもののいずれかに該当するものとなっています。

所有者の同意のもとに登録されるもので、登録されると相続税等の減免や保存・活用に必要な修理等の設計監理費などに対する補助を受けることができます。重要文化財と比べると補助は大きくはありませんが、厳しい規制がある指定文化財とは異なり、外観を大きく変えなければ改修や改装も認められており、有効に活用していくことが期待されています。

なお、令和3年3月1日現在、全国で12,970件が登録され、愛知県は541件（全国5位）となっています。



登録文化財のプレート

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは

愛知県内の国登録有形文化財の所有者を中心とする会（略称：愛知登文会）で、登録文化財の保存・活用を推進することを目的に、平成23年6月に設立されました。

平成23年度より文化庁文化芸術振興費補助金を受けて活動を行っており、本書の作成もその一つです。この冊子を通じて、愛知県内にある様々な登録文化財の魅力を知りいただき、歴史的建造物の保存・活用にご理解・ご支援いただければ幸いです。

愛知登文会では、登録有形文化財に関する情報発信事業にも力を入れており、LINE公式アカウントを開設して愛知県の登録有形文化財建造物に関する情報を発信しています。このシステムを利用すれば、愛知県内の登録文化財情報を検索できるとともに、現在の位置から近い位置にある登録文化財を地図上で示してくれる機能や、地域別に文化財を巡るスポット情報を提示する機能などもあり、

スマホを利用して、旅先などで簡単に文化財を楽しめるようになっています。さらに、SNSの機能を利用して、愛知登文会のシンポジウムなどのイベント情報や、その他の文化財に関連するニュースや補助金などの情報も得られるようになりました。こうした情報技術も活用し、登録文化財の保存・活用の輪を大きく広げていくことができればと考えています。

愛知登文会 会長
小栗宏次



愛知登文会LINE公式アカウント

あいちのたてもの いのりのは編

2021年3月22日発行

発行者 愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会 <http://www.aichi-tobunkai.org/>

会長 小栗 宏次

【事務局】名古屋市中区錦三丁目6番15号先

名古屋テレビ塔株式会社内 info@aichi-tobunkai.org

編集・企画 株式会社 都市研究所スペーシア

執筆 はじめに 飯田 喜四郎

本文 村瀬 良太

写真撮影 水野 昂彦／熊本 仁志／竹内 久生／伊藤 朋香／ヨシダヒロシ／みなちょむ

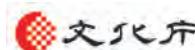
写真提供 五十嵐 太郎／石田 富男

制作協力 篠 清澄／小山 興誓（株式会社魚津社寺工務店）

題字 水谷 月菜／村瀬 良太

イラスト・構成 村瀬 良太

デザイン 墓 昌宏（有限会社エピスワード）



本冊子は「令和2年度文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）」により作成しました。